
エブラード王国物語 - 異界の魔獣使い -

hiro33

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エブレード王国物語 - 異界の魔獣使い -

【Nコード】

N1933Y

【作者名】

hiro33

【あらすじ】

魔道船の事故に巻き込まれ大河に投げ出され、『死に戻り』・『黄泉返り』と呼ばれる現象により契約していた精霊とは契約廃棄となり、気づけば猫型魔獣と小人族に懐かれることになり、エブレード王国を中心に物語は進みます。

異界の魔獣使い - プロローグ - (前書き)

はじめまして初投稿です。最後まで続けるようにがんばります。投稿できる時が不定期になると思います。感想いただければ嬉しいです。

異界の魔獣使い - プロローグ -

プロローグ

その日、王都エブリード付近にて前代未聞の事故が発生した。

魔道船 - 方舟ヴァンガード - 最大収容人数1500人
事故当時の乗員乗客は1300人

巨大な飛行船ヴァンガードは
王都を出発後、乗員乗客を巻き込み大河へと墜落する。

死者行方不明者1246人生存者54人と言われ、今世紀最大の魔道船事故として
後世の歴史書に記されることとなる。

乗員乗客にとって不運だったのは、ヴァンガードが大河ではなく大地に墜落
していればまだ生存者が多かったはずであった。

本来ならば墜落しても生存できるように、魔道師が施した魔方陣により乗員乗客の
命が助かったはずなのだが、墜落した場所が悪すぎたのだ。

大河ムーリルヴァアの川のご真ん中へと墜落し、
乗員乗客1300人を乗せたヴァンガードは大河に沈んだのだ。

泳げる者がいても大河に住む水棲の妖獣、魔獣の餌となり、運の良い乗員乗客で

幸運だった泳げる者と、ごくわずかな魔道の使い手のみが生存することが出来たと

言う、史上最悪な大規模事故であった。

岸からの救助を行おうにも、大河にいる数多の水棲の妖獣、魔獣により近づくことも

出来ず大河は乗員乗客の阿鼻叫喚と水棲の妖獣、魔獣の歓喜の咆哮が続き、

大河が犠牲者の血で赤く染まったと後世に伝えられた。

魔道船 - 方舟ヴァンガード - 空を飛ぶ飛行船の先駆けであり、先駆者としてつけられた。

ヴァンガードの名は、皮肉にも後世に大規模飛行船事故における先駆者として

名を残してしまったのである。

異界の魔獣使い 1

1

魔道船 - 方舟ヴァンガード - の事故より一月が経った。

王都エブラードより公式発表として、魔道船 - 方舟ヴァンガード - の乗客に

五大英雄の一人、傭兵王ルクサス公の孫の死亡を公式に伝えられ喪に服することとなる。

五大英雄とは

傭兵王ルクサス公

騎士王ヴァルチス公

精霊巫女姫ルチア

魔道王ガリア公

盗賊王ムルサ公

の5人を指す。

そして彼らと共に魔族の脅威より世界を救った救世主として王都エブラードの王にして、異界より流れてきたユウキ・スガワラを聖王として

現在の王都エブラードはまとめられている。

話は一月前に遡る。

大河ムーリルヴァに起きた、魔道船・方舟ヴァンガードの事故より数時間後である。

「なんとか岸につかねば」
大河ムーリルヴァに魔道船より投げ出され数時間、今だ大河から上がれず
流されるまま船の残骸と思われる木片につかまりなんとか生存してはいるのだが、
その命もまもなく尽きてしまつのではないかと、思わずにはいられない。

投げ出された直後は酷い有様だった。
泳げる者は、片っ端から水中へ引きずりこまれ溺死させられ死んでゆく。

魔道船が大河に沈んだことから、大多数の乗船乗客が今だ魔道船の中にいるはず
だろう、そしてその者達もすべて脱出出来ぬまま溺死していったことだろう。

「悪運が良いのか悪いのか…ありえない世界だ」
とりあえず五体満足には生きている。怪我もなく、今の所妖獣、魔獣に気づかれてはいない。

これがもし怪我でもしていれば血の臭いから妖獣、魔獣に襲われていたことは間違いないはずだ。

自分が助かった理由は、投げ出された直後に余り動かなかったことではないかと考える。

どれだけ流されこうしているのかもわからず、岸にたどり着こうにも川幅が広すぎるのだ。

流れは緩やかで、周囲に散乱する漂流物を見れば生存している者は自分だけ。

流れに逆らわず、なんとか岸へと近づこうとしているのだが、なかなか難しい。

頼みの契約精霊を頼ろうにも、精霊との証である紋様が肌より消えている。

考えられることは、精霊が契約を廃棄したと言っこと。

「まさか死に戻りか」

ありえなくはない。

大河に投げ出されたショックかはわからないが、一時的に心肺停止でもした可能性がある。

契約精霊とは、自分の能力になってもらうべく精霊と契約することだ。

強制的に契約することと、自然に契約出来る2種類のやり方がある

のだが、自分の場合は前者だった。
自分が生まれた時に、家族が強制的に精霊と契約させたのだ。

自分としては物心つく頃からいた精霊だったが、契約が廃棄された状態だと言うことは自分が

一時的にも死んだからとしか思いつかない。

精霊との契約廃棄には契約した者が死亡した場合と、契約した精霊から愛想つかされるかなのだが、
自分の場合は一時的でも心肺停止したからとしか思いつかない。

精霊は契約者が死ぬと契約解除されてしまったため、「死に戻り」、
「黄泉返り」した者は

契約した精霊との契約が解除されてしまい、今まで使役していた精霊が使えなくなってしまうのだ。

「死に戻り」、「黄泉返り」はそれほど珍しいことではないのだが、
噂では冒険者や傭兵、

騎士がそうなってしまうと、今までのように活動することが難しくなるため、新たな精霊と
契約しなおさなければならなくなってしまつとの話だ。

「なるようにしかならないかもだが、諦めるのも癪だ。こんな面白
そうな世界だし」

死ぬかもしれないと、諦めるのは簡単だ。

だが、こうして生きている以上命を捨てる気もないのも確かだ。

そろそろ掴まっているこの木片よりも、安定した大きさの浮遊物は
ないかと周囲を見渡せば、

樽が浮いているのが見える。

掴まるのは不安定があるが、確実に沈まないものとなるとそれくら

いしか見当たらないので、移動する。

樽は自分がなんとか抱え込める大きさだった。これを浮き輪にすこしずつ上げられそうな岸を探して移動する。どれほどの距離を、流されているのか分からないがなんとか移動することは出来そうだ。

『……………フギヤ……………』
掴んでいる樽の中から何かの声が聞こえた。

「?????」
空樽ではなかったのだろうか？

『だから……………』
声は動物のようなもの？と言葉のようなもの？が聞こえるのは気のせいだろうか？

「樽の中に誰かいますか？」
コンコンと樽を叩いてみる。

何も聞こえず、自分の気のせいらしい。
「長時間の漂流での幻覚か……」

低体温状態になりつつあるのだろうか、これは早急に岸めざして上陸せねばと考える。
「幻覚酷くなる前に岸目指すか。ここまでくればこれに掴まる必要なさそうだしな」

樽からはなれて泳いで岸を目指すことにした。ここまでくれば妖獣、魔獣の気配が薄い。

『まっ！待て……』

どつやら空樽には誰かいたらしい。

「こんにちわ。誰かしりませんが、人間じゃなさそうです」

『お願い岸へ一緒に…』

樽の中に何かいるか分からないが、同じ魔道船に乗っていたよしみで樽ごと岸まで泳ぐことに変更する。

「とりあえず岸まで、なんとか泳ぎつくようにするので、無事ついたら樽から出してあげます。ただし

襲ってこないで下さい。人族じゃなさそうだし」

『分かった…』

何が樽の中にあるのか気になるところだ。

異界の魔獣使い1 (後書き)

続いて投稿です。 よろしくおねがいします。

異界の魔獣使い2

2

たどり着いた岸边は、漂流物がたどり着きやすい形状になっているのか、

そこかしこ魔道船の残骸や荷物とおぼしきも物、余り見たくはない人が多かった物の一部が流れついている。

「さすがにきつい……」

なんとか樽を抱え、やや開けた場所へ移動した。

あとで流れ着いた荷物を確認してみようと思うが、濡れそぼった服が気持ち悪い。

「樽開ける道具探すので、待っててください」

自分の持ち物の確認が先だ。

腰に挿したはずの精霊憑きの剣は、やはりない。腰に付けた冒険者用の道具袋2つは無事だった。

これは一部の高レベル冒険者のみが、所持出来る道具袋で重さを感じずに持ち運び可能なため旅の必需品だ。

これを作った者に気に入られないと手に入れられないと言う物である。

これが流されなくて良かったと思う。

道具袋から、樽を開けるのに使えそうな小剣を取り出す。

「とりあえず開けます剣先に気をつけて」

ぐりぐりと少しずつ樽の縁に小剣を差込なんとか蓋を開ける。

『やった！出られたわ感謝する人間』

飛び出して来たのは真っ白な子猫？体全体に模様が入って……

「……驚いた白雪彪はくせつひょうの幼生体ですか」

まんま子猫にしか見えなくはないのだが、知るものが見れば白雪彪の幼生体だと分かるはずだ。

雪山に生息し、その毛皮は王侯貴族に好まれるSSランクの魔獣。

知能が高く狩るのはたやすくはないため、滅多なことでは狩ることが不可能な魔獣である。

『わかるの？』

剣呑な眼差しで見ないでほしい。

「分かる人は分かるはずですね。そのままじゃ何なので、首輪外していいですか？」

魔獣用の人にはか外せない仕様の隷従の首輪が、邪魔だろうと思う。

『えーこれ結構気に入った首輪なんだけどキラキラして』

見た目は確かに綺麗な宝飾をほどこしているのだが、隷従の首輪で追尾機能付のはずだ。

「付けたいのはかまいませんが、それ追尾機能付で隷従の首輪ですよ。付けた人間が貴方が生きていると分かれば追っ手がくるはず」

ちなみに人族や人型の者を、奴隷化する首輪は隷属の首輪といい魔獣用の首輪は
隷従の首輪と呼ぶ細かな機能の違いがあるらしいのだが、詳しくは知らない。

道具袋から自分の代えの服を取り出しつつ、濡れた服を脱ぎながらそう教える。

『ええっ！外して頂戴！人間！』

知らなかったのか、外せ外せとうるさい。

「着替えさせてください。まああの事故の混乱で、直ぐは大丈夫なはず」

なにせあれだけ規模の重大事故だ。

どれだけ下流に流されたのか分からないが、墜落した周囲はすごいことになっており、
それどころではないはずだ。

「白雪彪さん貴方の名前は？私は人間と言う名ではなく、スズ……いえセルファです。人族の男になります」

『名前なんてないわ。気づいたら人間のところにいて、あの船でどこか連れていかれるとこで……』

なんとか自分に起きたことを説明してくれた。
ハンターにでも生後まもなく捕まったのだろう。

「そうでしたか。では仮の名前を付けてもいいですか？名があるほうが呼びやすいですね」

なんとか濡れた服をすべて脱ぎ着替えの服を着込む。
やはり精霊契約の証は体から消えていると思いなから。

『……出して！……』

白雪彪の入っていた樽からまた声がする。

どうやらまだ何か入ったままだったらしい。

「まだ何かいるようですね……」

『忘れてた……』

白雪彪は自分が入っていた樽に顔を突っ込んで、何かを銜える。
樽には何かがあるんだと、セルファがみれば、小人族3名と何か分からないコブシ大の卵が1つあった。

異界の魔獣使い2（後書き）

連続投稿です。

異界の魔獣使い3

3

「野営の準備した方がよさそうです」

白雪彪が気になるが、詳しいことは野営準備を整えてからのほうが安全だろう。

「白雪彪さん詳しくは野営準備後と言うことで、この場所は完全に安全かわかりませんので少し移動します」

まあ逃げたきや勝手に逃げてくれてかまわないのだが、くつろげるよう野営準備してからで遅くないだろう。

セルフアは野営準備の為に、道具袋から結界石を4つ取り出す。精霊契約が切れてしまい、精霊魔法が使えなくなってしまうた不便さは多少あるのだが、結界石さえあれば周辺にいる魔物を寄せ付けることはないだろう。

ただし、すでに結界の中にいる魔物に関してはその限りではないが野営準備に必要な広さの四方に石を置き。中心に魔よけの魔方阵を展開させると、

大人が3人余裕で眠れる大きさのテントを取り出し設置する。

テントの幅を利用して紐を結び、濡れた衣類をそこにひっかけ濡れた衣類をそこで乾かすことにする。

魔方阵からそれほど離れていない場所に火の準備をすることにして、その辺に落ちていた枯木を集められるだけ集め、簡易竈を作るための石もいくつか探し出し準備する。

「こんなもんかな」

安全面が気になるところだが、とりあえずは休む必要があるだろう。

『セルフア感謝するわ。人間でも良いやつはいるのね』

隷従の首輪をはずしてもらって白雪彪は、毛づくろいしつつそう告げる。

「さてそれはどうでしょう。それよりも、これからどうしますか？」

所持していた簡易食で簡単な食事をすませ、ぎこちない様子の小人族へ聞く。

樽の中にいた小人族は女の子2人と男の子1人だった。

お姉さんな感じがエル、やや恥ずかしがりな子がミル、男の子はカイと言う名で

白雪彪の世話をする為に船に乗せられたらしい。

彼らも無理矢理、住み慣れた森から連れ去られ人間に隷属を強いられたらしい。

「王都では隷属する者は、犯罪者以外は禁止されたはずですが、

どこにも馬鹿はまだまだいるようです」

『セルフアさんありがとう』

『ありがとな』

『ありが…とうございます』

助けてもらった礼を言われるのは悪い気はしない。

小人族をこうして近くで見るのははじめてだが、なかなか小さく愛玩用に

隷属させたくなる気持ちも分からなくはない。が、セルフア自身隷属することには反対だ。

人であり他種族であろうが、犯罪者でない限り隷属し、自由を奪う権利はないと思っているからだ。

『セルフア、名前頂戴。名無しはなんか嫌だし』

「そうですね。貴方は白雪彪ですし、安直ですがシラユキはどうでしょうか？」

異界語の言葉ですが、白い雪と言った意味ですが」

異界語、聖王と呼ばれるユウキ・スガワラの故郷の言葉だと教える。

『シラユキ…私はシラユキ！わかったわ』

「気に入ったようでなによりです。省略して呼ばせたければユキだけでも良いでしょう」

『セルフアさん助けて貰ってなんなのですが、お願いがあるので』

小人族のエルがそう告げる。

「なんでしょうかエルさん？」

だいたい何が言いたいかわかるような気はするが、セルフアは聞いた。

『森へ帰りたいたいのです。私たちが住むエザイラの森へ・・・連れて行ってくれませんか』

やはりと思う。元居た場所へ戻りたいと誰もが思うことだ。

「…残念ですが、今は無理です」

そう言われた小人族が泣き出すのは当然で、助かった喜びもつかの間奈落へと落とされた気分だろう。

異界の魔獣使い3 (後書き)

連続投稿です。よろしくお願ひします。

異界の魔獣使い 4

4

『ちよつとセルフア、そんな言い方な...』

怒ったシラユキがガシガシと、セルフアの腕に噛み付いてくる。シラユキに噛み付かれるのは痛い、生きた毛皮の手触りは格別なものだと思つ。

「泣かないで、今はと言つただけです。痛いですよシラユキ！
こつちの理由も聞いてからにしてください」

こんなシラユキはかわいいなあと、のんきに思いつつも、現在の自分の状況を話すことにした。

「見て分かると思いますが、私は人族で本来なら精霊魔法を使用していました。精霊魔法は誰でも使えるようになるわけでないのはわかりますか？」

『わかる... 私たち捕まえた人間は使えなかった。雇われた冒険者が使っていたのは見た』
ミルが泣くのをなんとか堪えつつ呟く。

「人族では、冒険者になるのはだいたい精霊魔法が使える者や魔獣使いだけです。私も冒険者ですが、コレを見てもらえますか？」

道具袋から取り出したのは、冒険者ギルドのランクカードだ。

セルフア・???????

AGE : 1 1 2

SEX : ????

JOB : ????

HP : ????

MP : ????

INT : 8 0 6 4

DEX : 2 1 6

VIT : 5 3 7

STR : 1 4 2

AGI : 4 6 7

LUK : 7 2 3

称号 : ????

契約精霊 : ????

冒険者ギルドランク : ????

『…年齢 1 1 2 ! って人族じゃ。他も人族じゃありえない!』

カードを覗き込んで見るカイがありえないと叫ぶ。

「ええ、カードがバグっています。本来ならこんな数値はありえないですが、

私のこの体の年齢は19です…」

普通ならギルドカードがこのようになることはありえないのだ。

「今は無理と言った理由がコレです。困ったことに今の私では精霊

魔法も使えません」

さてどうしたものかと思う。

カードを見た限り表示されている数値はめちやくちやだし、

自分のギルドランクさえ分からない状態になってしまっているのだ。

「死に戻り……ですか？」

エルがそう呟いた。

「知ってましたか。多分としか言えないのですが、こうなる前に私は複数の精霊と

契約してました。着替えた時にすべて確認しましたが、契約していた精霊の紋様は

すべて消えています。今の私では、貴方たちの言うエライザの森へ辿り着くことは

非常に難しい。なので今は出来ないと告げただけです」

依頼されてエライザの森まで向かうのはかまわないのだが、精霊無しでは無理としか言いようがないのだ。

エライザの森は最低でもBランクの魔獣が出没するし、個人で行くのは難しくどうしてもチームを組まないと無理なのである。

「可能なのは、ふたたび契約してくれる精霊を探してからとなります。それが何年かかるかわからないので直ぐは無理ですし、早く帰りたいと思うのであれば、私など無視してランクの高い他の冒険者に依頼するしかないですね」

「死に戻り」も困ったものだと思う。今までしてきたことがすべてペアになるのだから。

ただ「死に戻り」にも1つだけ幸運が付けられる。精霊契約を廃棄される代わりに、あることが戻るのだ。

それを今は、セルフアも話すつもりはない。

『ねえねえ…セルフア契約って他のとは出来ないの?』

シラユキがふと魔獣である自分の今を考えて思う。

自分はかなり珍しい魔獣と言うのをセルフアから聞き知った。

今の状態では、また誰かに連れ去られる可能性もあるんじゃないだろうか…

どこから連れ去られたのか、両親の居る場所さえ分からないし、これから何かをしようとも思いつかない。

「精霊以外でも出来ますよ。魔獣使いと言うのもありますし……契約ですか」

シラユキを見て思うこのままでは、シラユキも危険に晒されるだろう。その希少性さゆえにだ。

『はい…ならアタシ、シラユキは契約する！セルフアとなら契約！珍しい魔獣は誰もが欲しがらるならセルフアがいい!』

狙った獲物を離すまいと、爛爛と目を輝かせたシラユキが言う。

魔獣らしくないのは、生後まもなく連れ去られ人間と過ごしてきたからだだろうか？

いや小人族の3人が、世話していたからだろうか？

こども魔獣らしくない話し方するのは魔獣は始めてみる。

「シラユキ契約は一生ものですよ。魔獣としての自覚はないのですか」

本来、このように柵からボタモチ的な幸運などありえないのだ。

まだ幼生体だが、SSランクの魔獣だ。

これが成長しきった時の成体の姿を思うと、どれだけの人族が欲しがるだろうか。

SSランクの魔獣を所持する魔獣使いとなると、片手分もないだろう。

「契約すれば、死ぬまで私に使役されることになります。まだ幼生体である貴方に、その意味が分かると思わないのですが、かと言ってこのままでは貴方を連れて歩くのは危険だろうし……」

セルフアは考えこんでもどうも出来ないことに、シラユキと契約するしかないとわかっていた。

「なあ兄ちゃん。こいつも契約できないか？」

話をずっと聞いていた小人族のカイが、樽からだした。謎の卵を転がしながら聞いてきた。

「カイくんそれは、非常食とかじゃなかったのですか？」

てっきり大きめ卵を、非常食として持ち込んでいたのかと想像していたのだが違ったようだ。

「違うよ。俺たちを捕まえた人族のおっさんがさ。こいつも世話しろって渡されたんだぞ。逃げるときに大河に沈んだら可哀相かと思っただけ一緒に連れてきたんだ」

かなり重くて苦労したらしいが、なんとか転がしてここまで運んだと言っのが卵の真相らしい。

『この子まだ卵だけど、私たちとは会話できた…』

ミルが卵をなでてあげている。

小人族が世話をしていたのは、卵に話しかけたり時折卵を動かしたりくらいだと言っ。

「これ何の卵なんですか？卵生の生物となると、孵化すれば出てくるのは鳥類か爬虫類か両性類？」

卵の殻の色はやや薄くブルーが入っており、水の属性の卵だろうと予想がつくくらいで、何の卵なのかもサッパリ分からない。

「孵化するとしても、いつか分からない上に、どのような状態にしておけばいいのか…」

何の卵かも、わからないのでは対処が難しいではないか。

『この子、自然の気を吸って育つ珍しい生物としか言われなかった。卵の殻が割れる時は孵化する時で、それまではどんなに高い場所から落としても絶対に割れないって』

エルたちは、この卵を人族のおっさんが実際に割ってみせる感じで硬い石畳とかに落としたりしたのを見たのだと言っ。

孵化する時に最初に見た相手に懐くらしいので、余程のことがない限り危険はないらしいとのことだ。

「そうですか。孵化しなければ契約もなにもありませんので、これ

は孵化するまで様子みるしかないですね」

生きている卵を道具袋へと入れるわけにもいかないだろうし、セル
ファは卵入れでも作って運ぶかと考えた。

異界の魔獣使い 5

5

魔方阵が作動しているとわかってはいても、大河から聞こえてくる妖獣・魔獣の鳴き声にエルがビクビクと反応している。

「火の番は私がしているので、先に寝てかまわないですよ」

セルファとエル以外は、すでにテントで眠っている。時折シラユキとカイの寝言が聞こえてくるくらいで、ミルは寝相が良いのだろう。静かなものだ。

「大丈夫です。セルファさんこそ助けていただいて、本当に助かりました」

改めて御礼を告げる。

「たまたまお互い運が良かっただけのことです」

気にしなくて良いとセルファは告げる。

「それでも、お礼は言わせてください」

「貴方は律儀な性格のようですね。エルさん、貴方は『死に戻り』をどこで知りましたか？」

焚き火の炎が消えないように、枯木をくべながらどれだけのことを

知るのが聞く。

「私が捕まっていた人族の所に居たのは、5年ほどです。その期間に二人の雇われて

いた冒険者が『死に戻り』でした。ミルとカイは、ここ1年の間に連れてこられたので

そのことを知りません』

「そうでしたか。私の方は噂程度には聞くのですが、自分が『死に戻り』だと言いつらすような人物は見かけたことがなかったですね」

「死に戻り」『黄泉返り』の当たり障りのない話は聞くが、どれだけの者がその状態になっているのかさえ不明だ。

「セルフアさん。私が知っていた『死に戻り』の方は二人とも死んです。自分が変わる

ことに耐えられず死を選んだ。いえ狂ったとしか言い様がない有様の果てに死にました』

セルフアも『死に戻り』だと言うのなら、そうなってしまっておかしくないのだとエルは言う。

助けてくれた恩人がそうなるのは辛すぎる。

「大丈夫。エルさん貴方には話しておいた方が良いのではないかと考えてはいるの

ですが、今はまだその理由を話せそうにないです。ただ確かに『死に戻り』は

変わります。以前の私であれば、このように”私”と言った話し方はしませんでした。

年齢相応に”俺”と言っていたはずなのですが、気づけば私と言い

方を変えています。

『死に戻り』の影響でしょうね」

同じように『死に戻り』の果てに狂い死にした者たちは、変わる自分に恐怖したのではないかと考える。

適性があるかないかの違いなのかわからないが、それくらいしか思いつかない。

『わかりました。セルフアさん。いずれは話てくださいね。』

「ええ　いずれ話せる時がきたら話ます。おやすみなさいエルさん」

明け方までセルフアは魔方陣と周囲の様子をみつつ静かな夜を過ごす。

いつの間にか転寝してしまっただらしい、うつすらと空は明るくなりつつあるが大河のすぐ側のせいか

朝靄が川面を隠している。

焚き火は消えかけ燻っていた。

夜に聞こえていた妖獣・魔獣の気配も消えているように見えるが、

水辺に近づいてきた獲物を狙い

潜んでいる可能性もある。

無闇に水辺に近づかない限りは安全だろう。

『おはよう〜』

シラユキがテントの中から出てきて猫科特有のしぐさをしながら、

大きく伸びをしている。

後ろからエルとミルが目を擦りながら起きてきた。カイはまだ寝ているようだ。

「おはよう。朝の準備はするので、死にたくなければ水辺には気をつけてください」

『????なんで?』

首をかしげるしぐさが可愛らしい。

「水辺に水を飲みに来た獣がいたとします。それを待ち伏せしている水棲の妖獣・魔獣の餌にされたいならお好きにどうぞ」

『……………』

自分が引きずりこまれることを想像してか、ブルブルと震えてうなずく。

「ただし、後ほど水辺に流れ着いていた荷物を見にいきますからそれまで近づくのは我慢してください」

流れ着いた魔道船・ヴァンガード・の積荷の一部を確認しておきたい。

「今日もここで過ごします。ある程度の準備をしないことには移動は無理です。そうそうシラユキこれを」

隷従の首輪と言われ外した首輪だった。

「解析して分かったのですが、隷従の魔方陣と追跡の魔方陣を組み込ませていたのは真ん中であつた
大きな宝石だけでしたので外してあります。いずれそこには別の宝
石いれてあげますので、残りは普通の首輪として使えます」

『わ〜い……そのキラキラつけて』

どうやらシラユキはキラキラしたものに目がないようだ。

「そして、エルにミルこれを」

差し出されたのは小人族サイズに作られた小さな三つの簡易リュック
だった。

「見張りが暇すぎて、卵入れ用の袋作るついでに作りました。今は
まだ入れられる物がそうないと
思いますが、おいおい自分の物が増えると思うので使ってください」

『セルフアさんありがとう』

エルが嬉しそうに言う。

『……セルフアさ……んお母さんみたい』

ミルも嬉しいのかもらつたりリュックを抱きしめつぶやく。

「私は朝食準備をしますから、焚き火の火の用意をお願いします。」
道具袋から取り出す食材で簡単なスープに、パンとシラユキには肉
を炙つただけで大丈夫だろう。

異界の魔獣使い5（後書き）

感想下さった方、評価してくれた方ありがとうございます。
まだまだ感想おまちしてます。

異界の魔獣使い 6

6

道具袋から新鮮な野菜を取り出す。

旅立ちで購入したばかりの物ばかりだから、種類はかなり豊富のようだ。

肉類はベーコンと干し肉と生肉が入っている。

乳製品に生卵まで入っているとは侮れない。

用意したのは自分じゃないんだがなと思いつつも、とりあえず作れそうなのをさっさと作ることにした。

スープをさっさと作ることにした。

調理用具から調味料まで各種色々入っていた。

これらを道具袋に入れてくれた者は、余程の食い道楽ではないだろうか。

とりあえず時間がかからず簡単なスープを作り、道具袋からパンと飲み物も取り出す。

「シラユキ、肉は生？少し炙るのもうまいと思うが・・・」

どのくらい肉の量を食べたいか聞いてから、何の肉かわからないが切り分ける。

『生！生がいい〜』

「わかりました。先にどうぞ」

シラユキの前に生肉を入れた皿を出す。

「エルさん 小さな食器がないので昨夜同様に3人で分けて食べてください」

『ありがとうございます。なにからなにまで。カイもいい加減そろそろ起きなさい！』
エルに起きろと揺さぶられカイがやっと起きてきた。

『にーちゃん・・・おはよう』
ふあゝとまだまだ眠たそうにあくびをする。

『ほらシャキツとする！』
『カイは・・・ねぼすけ』
ミルが寝起きのカイをからかう。

『ほらちゃんとこれ持って』
自分たちに合うサイズに木を削って作ったスプーンを渡す。

「パンがやや固かったので、スープに浸しておきました。そのまま食べてみてください。」
飲み物は、なんとかコップになりそうな木の実の殻を利用して、そこに入れた。

「食べながらで良いので聞いてください」

セルフアは、食後は川辺に行き、流れ着いた荷物を確認し、それが終わったら今後、どう行動をしたいのか話し合うので考えておいて欲しいと告げる。

『にーちゃん。これうめえな』
カイが、なかなか噛み切れないのかベーコンの塊に苦勞してるよう
だ。

『そういえばセルフアさん。家族に無事は伝えなくていいのですか
？』
自分たちと違って、セルフアには心配してくれる家族がいるのでは
ないかと思っただ。

「・・・そうですね。確かに身内はいますが、今は不味いです。見つ
かったら確実に軟禁されます！」

『軟禁！』
なにそれどこの犯罪者？

「ええつ。私の場合は、そこそ良い家柄もあって『死に戻り』し
たと知られたら軟禁されるのは確実です！」

精霊契約が廃棄されたのは、身内には即わかったはずだ。

自分が死んだと精霊が判断した時点で、精霊憑きの剣が身内の所へ
戻ったはず。

やや過保護な身内が、なんの精霊とも契約していない自分を外に出
そうとしないだろうことは確実だろう。

『にーちゃんも苦勞してんだな』

「ええつ。なので、早急に新たな精霊契約および魔獣使いとしても
使えるようにならないと不味いです」

でないと見つかった時点で、一生閉じ込められることもありえるのだ。

自分を心配してくれて、守るつもりなのだろうと分かってはいてもあそこでは自由は余りない。

『大丈夫。・・・シラユキ、セルフア守る！』

生肉を食べ終えて、毛づくろいしつつシラユキがそう告げる。

「そうですね。早く大人になって、一緒に訓練しましょう」
シラユキの大きさなら、後半年ほどで成長しきるのではないだろうか。

それまでに見つからずなんとかしなければならぬ。

いつそう魔獣使いの里に、住み込んでしまうのもアリではないかと考えたのだ。

異界の魔獣使い6（後書き）

書いていてお腹すいてきました。
どうもなかなか話が進みません。

感想おまちしてます。

異界の魔獣使い7（前書き）

前置きが多すぎたのか話がなかなか進みません
どこが魔獣使い？と思われるかもしれませんが
おいおい進んでいく予定です。

異界の魔獣使い7

7

太陽が眩しい。

今日も晴天になるようだ。

食事を済ませ片付けを終えたセルフアたちは流れ着いた荷物を確認に川岸に向かう。

昨日までは助かることしか考えていなかったので、

荷物が流れ着いているなど思っていた程度だが、

大河を見れば今だ色々と流されているようだ。ほとんど見た限りでは魔道船の残骸ばかり。

川岸には流れの関係か、色んな物がかなり流れ着いている。

昨日みた、かつて人間だったものの一部とかは消えていた。

夜のうちに死肉喰いの妖獣か魔獣が掃除したのだろう。

「運べない大きさの物を見つけたら言うてください。ああ、川には気をつけて」

セルフアはポケットからシラユキの首輪に付いていた宝石を取り出すと、

大河に向かって子供がよくする石を水面に飛ばす石投げをする。

綺麗にカットされていた宝石は、キラキラと光ながら何度か水面を跳ね大河に沈むと思われたのだが、

跳ねていく宝石に大口を開けた巨大な魚のような生き物にあつという間に喰われていた。

「ああなる可能性もあります」

つくづく昨日は運が良かったと思う。

犠牲者には悪いと思うが、大河にいた妖獣・魔獣の腹が満たされていたから襲われなかっただけなのかもしれない。

『すっげー。あんなのがうようよしてんだここはへーとカイが大河を見て言う。』

『もつたいな〜い』

あのキラキラ石欲しかったなあと思うシラユキだが、隸従とか追跡されるとかの意味を深く理解しきっていないようだ。

「これで当面は大丈夫か、追手が追跡を辿っても、大河の中と分かればそれ以上は探さない。

希少な宝石でもこの中に入り探すのは無理」

シラユキの背に乗る小人族三人は、宝探しだと散らばった。

「とりあえず運べそうなものから見るか」

流れ着いているさまざまな木箱を物色する。

見つけた木箱は、はじから道具袋へと入れてしまふことにする。

道具袋の大きさから見て普通なら入らないと考えられるものばかりなのだが、

一部の冒険者ご用達の何でも入るこの袋はかなり便利な品物だ。

買うにしてもまず売ってない。高レベルの冒険者にしか出回らないこともあって数は少ない。
(作られる数がなかなか増えないため、一般にまで出回ることがないのが理由なだけだが)

あらかた見える範囲にあった木箱を入れてしまう。

まだ川岸の水面に漂っている木箱もあったが、そちらは危険を考えあきらめることにした。

シラユキ達が見つけたものも、どんどん入れてしまい確認はおいおいすればいいだろう。

道具袋のなかにある限り、生ものだろうが腐ることもないのだ。

「こんなもんですかね。さて今後はどうするか決めますか」

『シラユキはセルフアについてく』

『俺たちは、いずれエライザの森に帰れりゃいつでもいいって話し合った。』

こうして生きてるだけでも運良いし、にーちゃんに付いてくのも面白そうだしな』

小人族の三人は、エライザの森は直ぐには無理と理解して話し合っ
て決めたことを告げる。

「わかりました。とりあえず何年かかろうが、いずれはエライザの森へ連れて行くことを

私は約束します。そしてこれを見てもらえますか」

道具袋から取り出したのは、エブレード王国のおおまかな地図だった。

大河ムーリルヴァはやや太い線でかかれており、王都エブレードの位置が確認できる。

「私たちが流された大河ムーリルヴァですが、現時点ではどの場所に居るかわかりません」

王都エブレードから、大河ムーリルヴァの下流にある地方都市ムルヴァーラ

「このムルヴァーラの方が近いはずなので、ここを目指します。

魔獣使いになるためのツテはあるのでその辺は大丈夫かと思えますが、

何年かかるかわかりませんが魔獣使いの里へ行き

訓練することになるので、シラユキ覚悟しておいてください」

『セルフアさんツテって、このムルヴァーラに魔獣使いの知り合いの方でもいるのですか？』

「ええ。友人が住んでいるはずですが。黒い狼系の魔獣を使っていますね」

ムルヴァーラまでは空からの魔道船なら半日、馬車で3日、徒歩で1週間ほどの距離になる。

かなり流されていたので、徒歩の半分ほどの距離を歩けばたどり着く可能性が高いと考える。

大河ムーリルヴァに平行した石畳の道が整備されているため、迷うことは少ない。

道中の妖獣・魔獣に夜盗さえ注意していれば良いだけだ。

「本来なら、この大河ムーリルヴァを船に降り下る手もなくはないのですが、

そのための大型船もなければ妖獣・魔獣除けになる魔方陣もない
めできません。

「ここは地味に歩くしかないです」

こうして大まかな方針が決まったことで、セルファは魔獣使いにな
るべく進みはじめることとなる。

異界の魔獣使い7（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

感想、誤字、文法の間違いの指摘ありがとうございます。
おいおい直していく予定です。しばしお待ちください。

異界の魔獣使い 8

8

ムルヴァーラまでの距離は、おおよそ二日で済んだ。

一日目はなんとか歩き、二日目の途中で荷馬車に乗車できたからだ。綺麗にならされた石畳の道を歩いていると、ムルヴァーラまで戻ららしい荷馬車が近づいてくる。

「あんちゃん、乗っていくかい？後ろなら乗せてやるぞ。魔獣使いとみたが…」

人が良さそうなおじさんが、荷馬車を止めてくれた。

「ありがとうございます。たいしたお礼もできませんが、かわりにこれをどうぞ」

渡したのは、荷馬車利用する時の大体の料金分のお金だ。

「まだ見習いで、これからこの仔の訓練に向かうんですよ」

「噛み付かないし可愛いものですよ。頭なでて見ますか？と差し出す。

シラユキには先に愛想良くするように言い含めてあるので、噛み付くこともなく撫でられている。

小人族の3人は人族に見つかるをやっかいなため、帽子のなかに隠れてもらっていた。

「ほほう。なかなか可愛いものだな。これは地彪の仔かい？色が白いようだ」

一般的に彪と認識されているのは、地彪である。地彪は大抵の山林におり、魔獣使いのなかでも良く見かけるのである。

「ええたまに居る色素がない仔なので、体が弱いのが心配なところですねえ」

大嘘である。希少性の高い白雪彪の仔ですとは言わないが、適当に体が弱いらしい幼生体だったせいで親が捨てたらしく、運良く手に入れたとだけ告げる。

「自然の掟も厳しいってことだな。さっ乗ってくれ」

荷馬車の主に礼を言ってシラユキを先に乗せると自分も後ろに乗った。

「そういえばここ数日大河が騒がしかったんですが、何かありましたか？」

魔道船の事故前から、この道を歩いていたんで、大河に浮かぶ残骸とか見たことをはなして様子を見ることにする。

「ああ。なんちゅう名前かしらんが、大型の魔道船が大河に墜落して沈んでよ。」

乗っていた連中も助かったのは僅かつてはなしだ」

「へーこの大河なんて妖獣・魔獣だらけじゃないですか」
おお怖つと身震いするような仕草をする。

「んだなあ」

当たり前障りのない話を荷馬車の主としながら最近の話題などを聞いて過ごしたのだ。

荷馬車の持ち主から聞いた話では、王都周辺は一時混乱で凄いことになったらしく、大河の妖獣・魔獣討伐に冒険者ギルドやら騎士ギルドに傭兵ギルドまで招集されたようである。

それでも討伐以前に、ただ見ているしかない状態だったようで、数少ない泳いで助かった者たちの支援に尽力していたとのことだった。魔道船に乗っていて転移の魔法を使えた者だけが無傷で助かったようだとのことだが、ほとんどがお貴族様だけであり一般の平民は絶望的とのことだ。

「まあ、死んだと思われてるかなこれは」
荷馬車の主に聞こえないように呟いた。

セルフアは連れ戻されない為にも、適うなら再度の精霊契約と魔獣使いとしても使いこなせるようにしようと改めて思うのだった。

「きゅ……う？」

何か言いたいらしいシラクキだが、他人が居る前では彪らしくするよう言い含めてあったのでしゃべることはないがかなり不満そうだ。

「今も王都は混乱してるかもしんねえなあ。犠牲者半端ないって話だ。身元確認しようにも妖獣・魔獣の腹の中か、船に閉じ込められたままの溺死だろう魔道船を引き上げるのも無理って話なのと、流された積荷を手に入れようとした馬鹿者が餌食になったって話も

聞いたしなあ」

荷馬車の持ち主と世間話に講じつつ、最低限の情報を手に入れたセルファだった。

ムルヴァーラには夕暮れ前になんとか到着をした。

「おじさんありがとう。思っていたよりも早く到着できた」

「良いつてことよ、こっちも臨時収入入ったようなもんだしな。またなにいちゃん」

去って行く荷馬車に手を振り、魔獣使いギルドへ向かうことにする。夕暮れ前のムルヴァーラは、家路を急ぐ者や歓楽街へ向かう冒険者の姿があちこちに見えた。

「さてシラユキ良い仔だ。もう少しの辛抱だから我慢して」

『ニア……』

シラユキを誰かに盗まれても困るので、抱っこしつつ移動する。

異界の魔獣使い 9

9

ムルヴァーラの門をくぐり、道の両脇に並ぶ露店を眺めつつ広場の方にまっすぐ進んで行く。

夕暮れ前にもかかわらず、露店を営業する商売人たちは、大声を上げおのおのの商品を売り込むことに余念がない。

「魔獣使いのギルドはっ」と……」

確かこの先の広場に入ってさらに右の道の奥の方だったはずだと、記憶を確かめ進む。

抱っこされたままのシラユキは、珍しさから周囲をキョロキョロと見回している。

見れば魔獣を連れた者たちがかかりいた。

狼、獅子、熊、彪、蛇、龍と見かけののだが、どれも厳しく躡けされているのか飼い主の側でおとなしくしている。

周囲も慣れているのかビクついていような者はいない。

ただ街中だけあって、用心の為なのか、大型の魔獣は口輪を付けている。

「驚いたかい？ここ出身の魔獣使いは、エブラード王国一と言われている」

ムルヴァーラの四分の一の大きさを占めているのが、魔獣使いギルドなのだ。

いわばムルヴァーラは魔獣ギルドの為にある都市であった。

危険の大きい魔獣が人が大勢住むような場所で、絶対に暴れたりしないように厳しく躡けて管理されているのだ。

広場から右の道を更に進んでいけば、獣特有の臭いがする。この道を入ったあたりから、魔獣を連れている人しか通らないようだ。

魔獣使いギルドは、扱うのが魔獣だけあるせいか、かなり大きな地所を所有しているのか、用心の為かぐるりと門で囲っているようだ。扱っているものが魔獣である以上、何が起こるかわからないからだろう。

門には見張り番が立っているが、特に声をかける必要もなくそのまま進む。

魔獣使いギルドと呼ばれる建物には、初代の設立者が所持していたと言っ

狼を模した旗がかけられており、面白いことに5階建ての建物に入り口が3つほどあった。

それだけでなく、見える範囲では夕暮れの訓練を始めるのか複数の魔獣使いが

訓練棟らしい小型のコロッセオのある方へと向かう姿も見られる。

そして上空からは時折、大型の鳥や龍といった飛行可能な魔物が降下してくる姿もみられた。

「もう少しだけ黙っていて」

入り口が3つあるが、どこから入っても良いようだ。

魔獣によっては、やはりどうしても相性があるのかどんなに躑けしても、

ここでたまたま会った魔獣同士で喧嘩しないとは言いきれない状態になることも

あるようで、出入り口を増やすことでかちあわないように気をつけているのだ。

比較的小型の魔獣を扱う受付に向かう。

「すみません。ギルド長に会いたいんですが、居ますか？昔馴染みなんで会って話したいことがあるんで」

受付に居たのは犬耳を持つ獣人の男性であった。

受付業務は、魔獣を扱うことを考えて、男性しかしていないようだ。奥の事務処理や喫茶する場所では女性も働いているのが見え人族だけでなく、ちらほらと獣人などの姿も見えた。

『少々お待ちください。…ギルド長ですが、現在は魔道船の事故処理の支援のため王都エブラードにいるようです』

管理職の予定表の見てそう告げる。

「タイミング悪かったか。そうですか、なら不在のギルド長の補佐に誰がここにいますか分かりますか？」

『ギルド長の妹さんの、エスティアさんですね』

「わかりました。エステシアとも昔馴染みなので、面会出来るように話通してもらえませんか？会いたくないと言われても、会わないと絶対に損すると伝言してくれば会おうとしてくれるはずなので」

『かしこまりました。面会用に、そこに見える階段で2階に上り左側を進んで行くと、

6と書かれた扉の部屋がありますので、そこに入りお待ちください。』

受付に礼を言っただセルファはシラユキを抱えなおすと、言われた部屋へと向かう。

シラユキと言えば、見るものすべてが珍しいのかキョロキョロと世話しなく首が動いている。

色んな種類の魔獣使いを見れるのは、このギルドだからだろう。小型から大型までかなりの種類の魔獣が見れるのだ。

時折、魔獣の唸り声が聞こえるが皆慣れたものだ。

「ふう〜。なんとかここまで無事着いた。お疲れ」

エステシアが来るまで椅子に座り待つ。かぶっていた帽子を側のデスクに置いた。

『すげ〜なにーちゃん。魔獣だらけだ』

ごそごそと帽子から出てくるのはカイだ。エルはミルが出てくるのを手伝っている。

「その為のギルドだしね。シラユキも良い仔だ。魔獣は、喋れる個体もいるにはいるんだけど、流暢すぎるのはまずいんだ」

『ふうんそうなんだ。面倒だ……』

ぐぐつと体を伸びしながらシラユキはセルフアの横に座り毛づくろいをはじめめる。

「だから人が多い場所で喋るなら、カタコトにすることかな。あと猫科の魔獣らしい唸り声とか鳴き声かな」

『ニヤア…とかデスカ』

「そうそう。用心しとかないと、シラユキを連れさらう馬鹿も出てくるからね」

軽く雑談をしていると、廊下の方から待ち人が来たのか騒がしい。

異界の魔獣使い 10

10

魔道船の墜落事故もあり、今後その処理をどうするのか王都エブラードへ向かった

ギルド長である兄の代わりに、執務室にいるエスティアは、兄が溜め込んだ書類の山にうんざりとしていた。

「だいたいあの人は、なんでこつも毎回毎回私に書類の処理をさせるんだ……！」

兄がきちんと処理していれば、自分がする必要がないものである。

コンコンとドアをノックして、兄の付き人の一人が入ってくる。

「失礼します。ギルド長の昔馴染みと言う男性の方が訪ねてきています。」

話したいことがあるそうなので2階にある6番の部屋にお通ししてあります」

「え……兄の知り合いなら私はパス！面倒くさい……これ見なよ。この仕事の量！」

人に会うことまでさせんなと、バンバン叩いて机の上に溜まる書類の山を見せて言う。

「ですが、その方はギルド長だけでなく、貴方とも昔馴染みらしい

ので、会わないと
絶対に損をするとおっしゃっていたそうなので、会うだけ会わない
と困るかもしれません」

「なにその謎かけ……。ん……。しゃあないわ会つか。んじゃ行つて
くるから、
書類処理の終わったものは机の上の処理済棚にあるから後の処理よ
ろしく〜」

ヒラヒラと手を振って執務室を出る時に、部屋に居たエステリアの
魔獣が肩に乗ってくる。

『エステリア、ドコイク？』

「知り合いが訪ねてきたらしくてさ、これから行くところだよ。ステ
ラ」

肩に乗ってきたのは鷲型の魔獣だ。この魔獣の特徴は自分の大きさ
を自由に変更する
ことが可能なため飛行型魔獣の中では人気の高い種である。
当然、エステリアを乗せて空を飛ぶことも可能である。

『…シリアイ？』

「昔馴染みって言ってたからねえ〜まあ友達の誰かだろうさ」

ステラと会話しながらエステリアは昔馴染みが待っていると言う部
屋にむかったのだ。

「誰だい？私に会いたってのは」

やや不躰な入り方かなと、チラツと思ったがまあ昔馴染みなら気にしないだろう。

「元気そうだね。エスティア……」

「……セルフア！……死んだって聞……いた」

兄からの魔道具を介しての連絡事項の会話でそう聞かされたのだ。

本当に本人なのかと、ガバツと抱きしめ確認をする。抗議のためかステラの声も

聞こえていたが無視である。

セルフア本人か確かめるのが先だ。

『ちよつとおばさん！…私のセルフアに、抱きつかないでくれる！』

シラユキが邪魔なんですけどと、エスティアに噛み付く。

「イタツ……」

『なによ！このむちむちの脂肪の塊で、アタシのセルフアに抱きつかないで！』

目の前に現れた人族女、しかもむちむちのでっかい胸！

金髪で、青瞳で、いかにも頭が軽そうな美人にシラユキはシャーッと威嚇する。

「すまないエスティア……」

シラユキの首根っこを掴んで、噛み付いているエスティアから引き離す。

「いやこっちこそ、興奮しすぎた。臆がなつてないようだねこの仔」

ピンッとシラユキの鼻っ面をはじいて言う。

『イタッ！おばさんなにすんのよ！』

シャー、シャーッと首根っこつかまれたまま威嚇しまくるシラユキである。

「ああもう。シラユキ大人しくしないか！」

興奮状態のシラユキを抱っこしなおして言い聞かせる。

『アタシ、このおばさんキライ！』

フンッとそっぽ向く。

「まったく…とりあえず誰にも聞かれたくない話があるんだ。この部屋は安全かい？」

まさかこうもシラユキが、エスティアを嫌うと思わなかった。

「ああ大丈夫だ。しっかし死んだと兄から聞いたんだが、何故そう

なっているんだ?」

向かい側に座りつつ、確認の為きいた。

「いろいろあつて、まだ誰にも告げてないんだ。出来れば家に連絡をしないでくれないか」

どこから話すべきかと迷う。

『…………あのうセルフアさんこちらの方は?』

帽子の影からそ〜っと見るのは小人族の3人である。

「紹介がまだだったね。エスティア。この3人は小人族で左からエル、ミル、カイだ。

昔馴染みの友人なんだよエル。怖い人ではないから大丈夫。そしてエスティアこの仔はシラユキと言う」

抱っこしたままのシラユキは、まだ興奮状態なのか離さないように気をつける。

「…………こ…小人族! ……かつ…可愛い!」

噂にだけ聞いた小人族である。

小さくって可愛くつて、愛玩したいと思う? 1な亜人種だ。

「これ…………ほしい! ……セルフアちょうだい!」

ハアハアと危ない人になっているエスティアだ。

その変わりようにビクツとなる小人族の3人は、帽子の影に隠れつ
つ恐る恐る姿を

見せては、またビクツとなることを繰り返していた。

異界の魔獣使い 11

11

エステアの興奮ぶりにやや引いていた小人族の3人だったが、怖い人じゃないとわかって安心する。

『にーちゃんこの人、大丈夫か？』

主にお頭おつむのほうは大丈夫なんだろうかと、カイが聞く。

「まあ…女性はや可愛いもの好きだしね…」

『こつちに危害こないなら、どうでもいいけどさ』

エルとミルを守るのは、男である自分だと思っているカイだ。

「悪いね。こつちも小さいものに反応するとは思わなかったしな。さてエステア興奮する

のはやめて話を聞いて欲しい。家に連絡いれなくて欲しいと告げたのは、現在の私には契約している精霊がないからなんだ」

「えっ！………」

ガバツとセルフアの右腕を取ると、手の甲を確認する。右だけでなく左も同様である。

「銀朱ぎんしゅに紫紺ししこんの印がない……い……い……！」

「ああ…蘇芳すおうに代赭たいしやもだ…」

「馬鹿な…ありえない！精霊契約は一生ものはずじゃなかったのかい！」

「イレギュラーなことが起きた。魔道船・ヴァンガードの事故に巻き込まれた時に

『死に戻り』したようだ。この世界の記憶とは別に、もう一人の人格が今の私にはある。これがどんな結果になるのか予想がつかない状態だ」

「『死に戻り』だと！…いや……確かに…」

何かを思い出すように、エステシアは自分が知る『死に戻り』のことを思い出す。

エステシアが知る『死に戻り』の関わる記録は、最悪な結果のことばかりだ。

10年前に起きた、大盗賊グランの大虐殺、8年前に起きた魔道師ルネの地方都市

ガナイの消滅までもつと過去にも大規模な災厄を招いた者たちがいたがきりないほどだ。

これらの事件の首謀者は『死に戻り』であったことは各ギルド上層部と国の一部の上層部が知るだけだ。

あえて一般には知られていないのだが、『死に戻り』とは今現在の自分とは別の人格が

発生することと言われており、前世の記憶とか別人格が新たに生まれたと思われている。

『死に戻り』に耐え切れない者も多く、大抵は自死を選ぶ。が、ごくたまにそれに耐え切った者が大規模な災厄を起こすため、混乱を避けることも考え一般に知れ渡ってはいないのだ。

「なんかね。私の中の人？まあ不思議な感覚なんだが女性だね。聖王と同じ世界の

出身ばくて普通の主婦で、子供3人生んで孫は5人いたらしいね。死んだのは89歳らしい。孫もいて、満足いく死に方だったようだね。スズ・アララギだったさ。

『死に戻り』で発生した人格は、ランダムでどの世界から来るか知らないが、比較的平和だった世界から来たようだし、それほど心配しなくても大丈夫じゃないかと考えているんだけどね」

なんでもないことのようにセルフアは、告げた。

小人族のエルにも心配しなくても大丈夫だと言う意味も込めて話す。

「……確かに、セルフアの家に連絡はできないな……」

『死に戻り』と発覚した時点で、幽閉されて一生を終わらせることは確定してしまうだろう。

「そんなわけで、死んだこととして自由に生きようかと思ったんだ。」

『そうよ…セルフアはアタシというもの…おばさんは邪魔しないで

……』

落ち着いたらしいシラユキが、セルファに撫でてもらいながらつぶやく。

「この躰のなっていない彪はなんなんだ？」

「それなんだが、魔道船・ヴァンガード・の積荷に魔獣があったか調べることでできないか？」

小人族の3人も浚われていたことを話す。

「……密輸されていた可能性があるかと？」

「多分だね。あとこのシラユキ。よく見て欲しいんだけど、どの種の彪に見える？」

「地彪のアルビノではないのか？他の魔獣にもアルビノはいるからな。それにしても」

口が達者と言つか地彪らしくないしな……」

しげしげと見るが、エステシアがキラいなシラユキはフンとソツポ向く。

「……まさか白雪…彪か？」

よくよく見れば地彪にない特徴が見られる。

『ちよつと……なに……』

ふっふっふつと笑い出すエステシアに引くシラユキ。

「これが白雪彫の幼生体なのか！足の太さみせてくれ。牙の本数は……？」

ああでもない、こうでもないというシラユキのあちこちを触りまくる。

『……セルファ！……助け……モガッ』

口を大きく開けられ、牙の確認までされている。

「エスティアは魔獣フリークだ。まあこれからお世話になるんだし、我慢も必要だよ

シラユキ。そうそうエスティア。これなんの卵か分かるかい？」

水属性じゃないかと言うことだけ伝えるセルファは、謎な卵をエスティアに渡す。

「自然の気を吸って成長するらしい。それ以外は小人族とは会話出来たみたいだ」
「どんな風に会話したとか分からないが、セルファが知ることを伝える。」

「卵状態ではわからんな。うーんオババなら分かるか……んっ……」

卵を転がしたり、光に翳したり、自分の魔獣のステラに見せたりするが、ステラには興味なさそうだ。

「とりあえず、これはオババのほう詳しいかもしれない。セルファのことは兄が戻って

からどうするか決めるとして、ここにいるといつ見知った連中に見つかるか

わからないしね、オババの森へ行かないかい？」

「頼む。あと魔獣使いとしての登録できないか確認してほしいんだが……」

バグっている冒険者ギルドカードを渡す。

このカードは、本来なら他ギルドでも使えるカードなのだ。

「これまた凄いバグだね」

「ははは……新しく作った方がよいなら、セルフア・スズ・アララギで作れないかな」

自分の中にいるもう一つの人格、それが異世界から生まれ変わった自分の前世

なのか、それとも『死に戻り』の恩恵で新たに生まれた人格なのかわからない。

ただ分かるのは、自分の中にあることだけだ。

そしてスズ・アララギの持つ異世界の知識？は、こちらでも使えそうだと思いつながら。

異界の魔獣使い 12

12

エスティアが言うオババの森とは、魔物使いギルドの中にある森と
言うよりも、

公園と言った感じの場所だった。

使役される魔物の環境を考慮して、病気や怪我の治療などをこの公
園を使い行っているという。

水辺、森、岩場と多岐にわたるエリアに分けてエブラード王国の各
地にこうしたフィールドが
あるらしい。

そしてここは森をなるべく再現しているとのことだ。

71

「へー かなり本格的にしてるんだな」

魔物ギルドの建物の裏手から、最初は整えられた公園と言った趣だ
ったものが、歩いて先へ進めば進むほど森と錯覚してしまう。

「年に数回だが、ここを訪れた子供が迷子になって捜索隊が出る程
度には広いね」

「だろうな」

『なんだか懐かしい気がします』

エルがセルファの帽子の上に座ってつぶやく。

愛玩用に浚われて、こうしてゆつくりと、森に入ったのはどれくらいぶりだろうか。

ミルとカイは、シラユキの背中に乗っている。

ここの普通の森との違いは、ある一定の距離で設置している外灯だろつ。

発光する光る石を利用しているとのことだ。

「あれがオババの家さ。昼間は治療院にいて、それ以外はここで薬草などの世話してる」

詳しい年齢はわからないが、かなり物知りとのことだ。

木造の小さなコテージと言った家だ。家の前の畑には、種類豊富な薬草や花、野菜などが植えられている。

「オババくいるかい？」

エスティアが先に声を出しながら家に入っていく。

「オバ……ヒヤア……」

悲鳴のような声にセルフアは何事だと駆けつける。

「ヤメ……ヒヤア……」

「フオツフオツええ乳じゃ。…んむ。揉んでもう少し大きくするとええぞ」

真っ赤になってるエスティアを、後ろから羽交い絞めにする感じで乳を揉みまくっていた。

「……………」

見なかったことが無難だとセルフア。

まあエステアの胸が、揉み応えありそうな大きさなのは確かだが…。

「いい加減にしろ！…このエロババア。客の前でなにしゃがる！」

「フオツフオツ。ええ乳は揉んでやるもんじゃ！…さてのう。お客さんらしいがこんなババアになんのようにかえ」

「初めましてオババさん。エステアの友人のセルフアと言います。今日は見てもらいたい物があって、こうして来ました。これが何かわかりますか？」

気を取り直してセルフアは、何の魔物の卵かわからない。卵を渡す。

「んむう〜…卵じゃな。水蛇か水竜あたりかもしれんが、まだまだ孵化せんよこれはのう。自然の気が足りておらん。まあこの森においておけばよからうかのう〜」

後数年は、このままではないかとのことらしい。

「へえ〜。さすがオババ何でも知ってるんだな」

「そうですね。ありがとうございます」

「それはそうですね、そこにいる小さき子よ。なぜ、森の子がおるんじやっ？」

セルフアの帽子の上にしたエルを見て言う。

森の子、小さき子は小人族をさす。

「主らの仲間なら、この森にもおるぞえ。」

「ええっ！オババ小人族が、他にもいるのかい？」

なんで教えてくれなかつたんだと、エスティア。

「んむ。おるぞえ。この森は安全じゃからのう。ほいほい小人族のことを話せるわけがないのじゃ。」

オババ以外の者がいる時は、隠れているのだと言う。

小人族は、金になる。

浚われ売られてしまつてばかりでは、種族としても滅びてしまふ。

こつした安全な場所に匿うことも必要なことらしい。

オババが言うには、狩られる対象の愛玩用の魔物もここで保護して
ることとらしく、

魔獣使いでもなければこの中まで入ってくる者もいなければ、部外
者が立ち寄ることも

ないため盲点をついたとも言えた。

閑話1（前書き）

いつも読んでくれる方、感想くださる方、ありがとうございます。
どうも話がなかなか進まないので閑話入れてみました。

閑話 1

閑話 1

エブレード王国が所持している精霊憑きの武器は、刀剣類が8種、槍が3種、弓2種である。

これらは特異能力を持つ、聖王が創りし武器で、魔族との戦乱の時に創り出され、現在は聖王と親交の深い貴族に下賜されている。

聖王が持ちし天叢雲劍あめのむすくせのつゝね

妖刀正宗、雷切、村正、村雨、静御前、萌葱、藤紫

聖王が言うには、覚えやすいか言いやすいで決めたとのことらしいが、異世界風の名の由来は分からない。

単に名づけが面倒で、適当につけりゃいいでつけた名前なのだが、それは余り知られていなかったりする。

さて

傭兵王と呼ばれる五大公爵の一人、ルクサス公爵家に下賜された刀は静御前である。

名前の通り刀の精霊静御前は、女性型の精霊であった。

「聖王殿！……一大事でございます……宝具殿に静御前が戻ってき

ております！」
宝具殿を管理する文官の一人が、あたふたと駆け寄る。

「……ルクサスの所だったな。次代に受け継がれたはずだが……」
さてどうしたものかと、思案する。

「聖王殿…至急、救援をお願いします…大河ムーリルヴァに魔道船が墜落しました」

慌しいことに、次から次へと問題が発生する。

「静御前は後回しだ。先に魔道船の救助に向かう。手の空いてる連中は全員救助にあたり、他ギルドへも救助活動の応援を出せ」

聖王の一言により、魔道船の救助を誰もが優先したのだがそれでも犠牲者の数は多く、助かった者も少ないと言う結果にしかならなかった。

それが半日前の出来事である。

「ルクサス、静御前が黙して語らぬ」

魔道船救助活動を終え、城へと戻ってきたが皆憔悴が隠せない。余りにも悲惨な現場であった。

水棲の妖獣、魔獣の尋常ではない数とただ無残に喰われていく者たち。

周囲に散らばる物言わぬ犠牲者。

聖王と呼ばれた自分の力でも、大河の水を堰き止めることは出来な

い。
わずかに助かった者の救助支援しか出来なかったのが齒がゆいばかりであった。

「…聖王よ。孫が死んだと言うことでしよう。静が黙して語らぬ理由は、孫も魔道船に乗っていたからです」

「そうか…」

聖王が創った武器は、持ち主が死んだと認識すると宝具殿へ戻ろう生体認識の魔方陣がかけられていた。

「我が家に伝わる銀朱ぎんしゅに紫紺しこん、蘇芳すおうに代赭たいしやまでも、沈黙したままです。気が早い親戚連中が、是非に継がせて欲しいと名を挙げてますがね…」

「お前も大変だな。家を継ぐ道具としてあるわけではないのだが、そのことに気づかない。精霊の気が済むままにさせておけ。選ぶのは私たちではなく、精霊なのだから」

「わかりました。大きくなりすぎた家欲しさの連中には、それが見えていないようですし」

『……我は…我が主を…守れ…かった…』

囁く声は、聖王が持つ静御前からだ。

「静、気にするなとは言えん。だが、この先次代へと受け継がれることに同じ様なことが起こるかもしれない。人と精霊では生きる時間が違う。人は先に逝くことを覚えておけ」

「聖王よ。次の次代が決まるまで、静を所持願えますかな」

次代が決まらない今の状態で、静御前を所持するものが次代だと思われて、盗難にあう可能性もある。

「無論そのつもりだ。文句がある者がおれば、私の名をだせ」

「では、しばしの間よろしくお願いします。次代が決まりましたらまたその時に…」

そして主を亡くした刀は、しばしの間聖王の下にて留まるのである。

閑話1（後書き）

てな話が王都の方であったわけでは

ない。サイドストーリー的に閑話にて考えている話を載せていく
予定です。

異界の魔獣使い 13

13

結局、その日はオババの家に泊まりこれからのことをどうするのか話し合った。

オババが言う小人族は15人ほどの小さな集団で、この家の床下を利用して住んでいることも聞いた。

臆病なのか姿は見なかったが、小人族の3人とは仲良くなれたとのことだ。

小人族の3人には卵の世話を頼み、ここで一時的だが保護してもらうことで話がついた。

「さて、次はお前さんたちじゃな。魔獣使いになりたいとのことだが、すでに魔獣を所持していることで見習いレベルだろう」

魔獣使いになるには、特に難しいことではない。

要は自分に使役してくれる、魔獣を手に入れることが一番肝心なことなのだ。

なので、愛玩用の小型の魔獣を持つ者も、魔獣使いには違いはないのである。

ただし、一般的に魔獣を手に入れると言うことはかなり難しいので

ある。

何が難しいのかと言うと、まず魔獣を自分に懐かせることである。

懐かせたい魔獣がいた場合、その個体が幼ければ幼いほど良いのである。

生まれた雛鳥が、刷り込みで初めてみた物を親と勘違いするのと同じと思って貰えればよい。

そうになると幼い魔獣を手に入れる為には、親をどうにかしなければならず、人気の高い

魔獣ほど手に入れる為の危険性が大きくなると思って貰えれば分かるだろうか。

そのため専門のハンターもいるほどで、手に入れた幼い魔獣の売買の値段は魔獣のレベルにより変わるのだ。

「ただし、まだ半年は無理じゃな」

シラユキを見てオババが言う。

成長しきっていない為、今すぐ訓練に入るのは難しいとのことだ。

訓練と言っても、人との連携を深めることと自分たちの戦うスタイルを確立させるためである。

例えるなら空を飛ぶ魔獣を飼いならず まず懐かせて 空を飛ぶ訓

練をさせ 主人を乗せて飛び、

主人の戦いにあわせて自分で判断させるということを覚えこませるのだ。

必然的に、知能が高い魔獣ほど好まれるのが分かったと思う。

「あとは、『死に戻り』とのことじゃが、エスティア。お前さんの兄には言わんほうだよ

い。あれは、直情馬鹿なところがある。自分から気づいたら話してしまっていたとなる可能性が高い」

「オババ。ならセルフアはどうさせればいいんだい？」

「ばれなければ良いんじゃない。『死に戻り』はまだまだ謎が大きい。国のお偉い連中は、危険視だけでしかみておらん。確かに危険な過去の事件もあったがのう」

「ならば、どうしたいかはセルフア次第か」

「そうですね。顔さえばれなければ、こちらは問題ないと考えてはいるのですが、上位の貴族連中と家の傭兵たちに見られなければならぬかと考えてはいるのですが、難しいです」

傭兵王と言われているルクサス公爵家は、かなり規模の大きい傭兵部隊を抱えている。

こちらは顔は知らぬが、向こうは知っていると言つことはありえるのだ。

「顔を変えるか、隠すしかないじゃろうなあ」

「包帯巻くのは、変な病気持ちと思われるから却下だね。セルフア
いっそう仮面かなん

かで隠すとか、道化師メイクもあり？」

「道化師は勘弁してほしい。常に人がいるところで道化する必要ありそうだ。どこかの国が忘れたが仮面を付ける祭りがあるみたいだな…」

スズ・アララギの持つ記憶に、マスカレードと言うものが出てくる。完全に顔を隠すタイプから目元だけだったり、かなりの種類があるらしい。

特殊メイクと言う言葉も出てきたが、こっちは難しそうである。

わざと怪我している風にメイクすることのようだ。

「細工師にも相談できないか？ 思いついたことがある。後は魔方陣をうまく利用できれば誤魔化せそうなきもする」

「巻き込む人間は、少ないほうが良いんじゃないかい？」

「そうなんだが、協力者が多いにこしたことはないのも確かだと思う」「お前さんの持つ異世界の知識なんじゃろう？ 巧くいけば周囲も巻き込めるなら話してみんか？」

オババはセルフアが思いついたことを話してみると言う。

それは奇妙な話だった。

仮面をつけて普段ではない自分になりきり、祭を楽しむと言うイベントが異世界にはあるらしい。

顔が隠れてしまい、誰だかわからない状態をあえて楽しむ仮面舞踏

会とも言つらしい。

「面白いかもしれぬのお」

この世界での祭りと言えば、豊穰祭か季節の変化を精霊に感謝する祭くらいである。

「この商人連中を巧く巻き込んで、イベントとして定着させるのも有りかと思つたんだが、出来そうか？」

自分の顔を隠すためだけの思いつきであつたのだが、真新しいことに目がない商人を巧く乗せ、町1つを巻き込んでマスカレード祭りとして定着してしまつたのは、1年後の話である。

異界の魔獣使い 13 (後書き)

読んでくれてありがとうございます。

どうも話とばしすぎかなあ

異界の魔獣使い 14

14

セルフアがムルヴァーラの町へ来て、二月ほど後の話である。

最近巷で起こる噂話の一つに、ムルヴァーラの町を歩く仮面の人の話があった。

人によって付けている仮面は違うようで、異様な雰囲気になるらしい。

特に何かすると言ったことではないのだが、その仮面が奇抜すぎる。

勇気を持って声をかけてみれば、異様さとは裏腹に一年後にこの町で行う予定の新しい祭の下準備と宣伝をかねて、今から少しずつ周囲の人に宣伝をはじめたとのことである。

詳しく知りたければ、商店街の顔役に問い合わせと、警邏する役人への根回しもあるのか不審者として通報されても、役人からも仮面のことを説明してもらうことに

なり、じわじわとだが、確実にマスカレード祭りが浸透していく。

王都および周辺の町や他国までも、可能であれば一年後開催予定の祭をギルドなどを

介して告知が貼られている。

ただ魔道船の事故から、そう経っていないことから何を考えてい

るのだと上からの
抗議があつたのだが、逆にマスカレード祭とは、互いの顔が分から
ない相手との祭を
楽しむことと説明し、今回の事故で身内を亡くした方は、特に参加
して欲しいと伝えた。

事故で戻らないのはわかっている。

だがもしも、どこかでまだ生きているのではないかと誰もが望むは
ずで、

マスカレード祭で、沢山の仮面を付けた人のなかに故人がいるかも
しれないと思うだ

けでも慰めにならないだろうかとの説明をし、故人だけでなく、力
ある精霊は人型を

取れるので、こっそり遊びにきてくれるのを楽しんでもらう為だと
説明したこともあ

つて、一年後の開催することは上からひとまずは受理された形とな
った。

「なんだこりゃ……」

ある日の冒険者ギルドに貼られている依頼書を見て、ある冒険者が
発した声である。

冒険者ギルドに貼られている、ランクFの依頼書

依頼主 ムルヴァーラ ライラック通り商店街代表 ロドリック・
ペイン

依頼内容 ・一年後に開催予定の祭、マスカレード祭の宣伝

・支給した仮面を付けてこちらの指定した町にある5店

舗からスタンプを

集めること

・仮面はスタンプ集めに必要なため、依頼を受け、終了した報告をするまで

は付けて歩くこと

・仮面を付けて歩いているところを聞かれたら、かならず一年後に祭を開

催することを聞いてきた相手に伝えること。説明が難しければライラック

ク通りの商店街だけでも良い。

報酬

5リーグ

冒険者Pt 0.5Pt

期限

その日のうちに

募集人数

一日20人まで

募集期限

祭が開催される前日まで

報酬の受渡し条件 集めたスタンプを押した紙と、貸出した仮面の返却

と、このような内容の依頼書が貼りだされている。ランクFは町のおつかいレベルである。

報酬の5リーグはだいたい1食分にかかる料金で、報酬は少ないが子供でも出来る内

容にしてあるためか、レベルが低かった冒険者や、ちょっとしたら

ンチ代稼ぎに人気が出ていますよ。

現在の募集人数が後、5人となっている。

「募集期限が、祭開催の前日までだろう。一年後らしいから大体378日だよな。」

毎日欠かさずできたとして1890ルーグで、冒険者Ptが189Pt

一日の報酬としてはかなり低いが、長い目で見れば危険がほぼ少なく安全にこなせる

依頼としてはかなりおいしい。一日の内の1食分が確実に稼げるからだ。

いかつい冒険者が、指定の仮面を付けて歩く姿は滑稽で笑いを誘うが、生活がかかっ

ている冒険者からすれば楽な依頼をこなしつつ、他の依頼も受けるのにはもってこいとあって人気がそれなりにある募集となったようである。

「まずは冒険者ギルドを利用しての宣伝開始。おめでとついでいませ」

セルフアは冒険者が付けて歩く仮面と似た物を自身もつけて、祭の

主催者になっても
らったロドリック・ペインと会談をする。場所はオババの家のテラスになつていた所である。

ちなみにシラユキは側にはいない。

そろそろ魔獣の本性を思い出すようと、セルフアと別に体に負担のないことから訓練を開始させているからである。
セルフアが一緒だと甘えが出るため、別々に訓練することになったのだ。

「オババ殿から聞いた時は大丈夫なのかと思ったが、本当に成功する祭となるのかね？」
まだ半信半疑なロドリックである。

「大丈夫です。資金のほうは、こちらで用意しましたし、これからこの町の皆さんを巻き込んでいきましょう」

魔獣ギルドでなりたっている町とはいえ、やはりそれなりに稼げるなら稼ぎたいと思うのが誰もが考えることである。

「祭をするに何が必要で、どの通りを使用し、どうやって開催するか記入したものを

お渡ししますのでよく読んで分からなければ質問をおねがいします」

紙に書かれた書類の束をロドリックへ渡すと、セルフアは、用意されているお茶を飲む。

ちなみに今付けている仮面は、鼻より上の部分を覆うような感じの

仮面なため、飲んだり食べたりするのは困らない。

要所を中心にざっと読むロドリック。今すぐに自分だけで決めるのは難しい内容であった。

「良く考えつくものだな。これならある一定の者だけが稼ぐのではなく、祭に関わった者は稼ぐ気さえあれば稼げるようにしてあるのか」

「はい。ただ、協力してもらえなければそこまでは無理ですね。出来れば、すべてのギルドの方々の協力が必要です」

幸い、魔獣ギルドはオババとエステアの協力をとりつけている。仮面を作るにあたっての細工師など工芸ギルドの協力も取り付けた。祭に必要なことを考えると、次から次へと行動しなければならぬ。

「わかった。これを必要と思われるギルドへの連絡は、こちらが君と話し合い協力しよう。無事開催するまでよろしくたのむ」

青年と握手をするロドリックは、痛ましげな風に青年をみつつ会談を終わらせたのである。

ロドリックが痛ましげに見ていたのは、仮面の隙間からみえる顔半分を覆うように

できた火傷のケロイド痕である。

仮面で隠してあるが、火傷痕は隠し切れておらず、火傷痕がなければかな好青年なのだろうと思われたからだ。

まあセルフアからすれば、単に付けている仮面の理由に顔に火傷痕があり、素顔を見せたくないように思わせる為に火傷痕と見える魔方陣を仮面にかけているだけなんだが、理由を知らない者からみれば、顔に傷があると痛ましげに思われ深く見られないと思つてのことである。

「素性を探られないようにするのはこんなものとして、私もそろそろハビリしますか…」

冒険者ギルドへは、結局新しい名前での登録となった。

セルフアの名前をなるべく出さずスズからスーズとして通り名とした。

そのせいかギルドランクが初心者レベルに近いEランクからのやり直しである。

本来なら、Gランクからはじめるのだが、エステシアが申請したことでEランクまで引き上げされたらしい。

異界の魔獣使い 15

15

Eランクの依頼からは、採集関連のものが多くなる。

討伐はあるにはあるのだが、ムルヴァーラの周辺の森や平原だと群れで動く魔獣が

中心になるせいか、Eランクの場合討伐系の依頼は何人かでチームを組んで行うことを推奨されているようだ。

「採集系で良いか」

特に金銭にも困ってはいないが、比較的同じ生息地にある採集の依頼を2つ受けることにした。

採集系だと2つまで、討伐系を受ける場合は1つだけと決まっているようだ。

「こちらの2つですね。期限は2つとも3日以内をお願いします」

魔獣ギルドと違い、冒険者ギルドの受付は、女性も可能らしい。

「わかったありがとうございます。注意することはなにかありますか？」

「そうですね。採集の場所近くは、毒蜂や咬みつき蜂がいることがあるようですので、薬を用意した方が良くもしません」

咬みつき蜂は、珍しいことに蜂の外見をしていながら針で刺すのではなく、咬みついて麻痺させる魔蟲といったところだろうか。

「わかりました。ありがとうございます」

ランクE 依頼書

依頼主 ムルヴァーラ ムーンズナ通りルミング薬草店 メイア・ルミング

依頼内容 ・麻酔薬用の原材料採集 ムルツキ草 5束

・滋養回復薬の原材料採集 アウレー草の根 5束

注意事項

・麻酔薬用のムルツキ草は、ウナツキ草と間違えやすいので注意

・アウレー草は、採集時に草汁に注意してください。かぶれやすいです。

・どちらも森を中心に生っていると思いますが、魔蟲に注意してください。

報酬 1束10ルーグ

・こちらの依頼より少なくなっても、多くなってもかまいませんが、多く採集して

しまった場合の買取は各10束までとします。

冒険者Pt 30Pt

期限 3日内

募集人数 1〜3人

募集期限 張り出された日から1週間後まで

報酬の受渡し条件 採集した薬草をルミング薬草店まで、持ってきてください。依頼完了

了の書類にサインをいたしますので、それを受け取った後に冒険者

ギルドにて報酬の受け取りをお願いします。

セルフアが受けた依頼内容は、依頼者が女性だからだろうか、わざわざ注意事項まで書き込んでくれていた。

「アウレー草の根は採集用スコップが必要だな」

さすがに、何でも入る道具袋でもスコップなんて入れてない。

足りないと思えるものを、道具屋で揃えてから向かうことに決めた。

冒険者ギルドをでて、周辺を見回せば直ぐに道具屋のある場所が見つかる。

もともと、冒険者が依頼を受けてから即用意可能なように、ギルド周辺に店を集中させているのだろう。

「いらつしゃいゝ何が必要だい」

威勢のよい店員が、セルフアに聞く。

「薬草採集用の小型スコップと、採集したものを入れる袋をお願いします。大きさは中ですかね」

「はいよ。お客さんそれマスカレード祭とかつてのに使う仮面だろ。それどこで買えるか知らんかい？ギルド貸出し用とは違うみたいだからさ」

商店などには、すでに情報が回りだしているようだ。

「ロドリック・ペインさんてわかりますか？この祭の主催者なんです。その人に聞いてもらうか仮面作る工芸ギルドに問い合わせして聞けば良いと思いますよ。通りごとにお揃いの仮面とか作ってもらのも面白そうですね」

・採集用小型スコップ 12リーグ

(家庭菜園にも使えるらしい)

・採集袋 中 6リーグ

「おおそれは良い案かもしれない。はいよ2つで18リーグだが、おまけして15リーグだ提案の礼だよ」

威勢の良い店員に礼を言ってスコップと採集袋を道具袋にしまいこむ。

薬も用意したほうが良いと言っていたが、こっちはすでに道具袋の中に各種あるため用意する必要はなかった。

「武器は、見るか…」

失った精霊憑きの武器とは別に、道具袋に普通の武器も用意してはいたのだが、銘のある武器なので見る人が見れば所持者が誰かばれる可能性があるので使うことは避けたい。

短剣などは銘がないため大丈夫なのだが、やはり武器の所持は必要

だろう。

武器屋はどこかと探せば、道具屋の裏側の通りにあるようで、最近の武器はどんなものかと確認もかねて見ることにする。

バルゼク武器店　人かそこそこ入店しているようで、それなりの店らしい。

壁にかけられている大型の武器（鑑賞用か？と思う大きさである）

どうやらこの店は剣を中心とした武器屋なようで、投擲用の小剣から大剣が主流のようだ。

「はいよ次〜…」

店員さんに肩をポンと叩かれ、何が次なんだろうと疑問がわく。

「あれ、お客さん依頼を受けた人じゃなさそうだね。仮面つけてたからてつきり依頼を受けた人かとおもったよ」

どうやらこの店は、マスカレード祭を宣伝するためのスタンプを押す店の一つだったらしい。

「ああ。そうだったんですか。何かと思いましたよ。ブロードソーダが欲しいのですが…」

「悪いが手見せてもらえるか？」

どれだけ使えるのか、手をみてから判断しているようだ。

「悪くはないな…いや…これは…」

なにやらブツブツと呟いては考え込んでいる。

「武器は、主流のものならほぼ使えますが」

「のようだな。本来は刀じゃねえのか？握った時のクセとかがそんな風にみえるんだが…」

「ええつ。失くしてしまったので…」

「刀はあるにはあるんだが、値段がここにある武器と1桁違っただが買えるかにーちゃん？」

刀の技法は、本来この世界の物ではなかった。異世界からの技術なため、作れる者は多くないらしい。手入れや修理などはここでも

受け取りは可能で専門の刀を扱う所に頼むらしい。

「価格によりますとしかいえませんね」

「まあ 見るだけみてみるかい？ おい この番頼む奥に行ってくる」

近くにいた店員に声をかけ、セルフアに奥へ一緒の来いと合図する。

「奥にも武器あるんですか？」

「ああ。表のは一般的な武器だけだ。それなりの見えそうな相手には、奥を見てもらっている」

冒険者などの実力を見てから売っている店らしい。かなり玄人と言ったところだ。

「…これは、凄い……」

1桁違うと言っただけの種類の武器が置かれている。

精霊憑きの武器ほどではないが、銘なしにもかかわらず思っていた以上の出来である。

「どれもすばらしい物ですね」

刀といっても種類がいくつかある。太刀、忍者刀、野太刀、小太刀、長巻、短刀、脇差 e t c e t c
ここにはそれらの半分近い量が置かれているのである。

「おう。そう言って貰えりゃ作った奴も喜ぶな」

「その方は？」

「もう随分前に、寿命で死んだ。なんでも異世界の刀鍛冶師って話だが、

ありゃどうみて生粋のエブラード人だぜ。

法螺話にしちゃあ、良い刀作るじーさんだったがね」

セルフアから見れば、その人も『死に戻り』した者と思えない。既に、死んでしまっているので確認出来ないのが残念だが。

武器屋の店員こと店主だったらしい。名をガンク・バルゼクのとことだ。

「ガンクさん。その方が作った武器、すべてください」

「ぶっ！…にーちゃん冗談はなしだぜ」

通常一般的な剣の価格は、初心者用で最低でも5000ルーグである。

桁1つ違うと言われる刀だと初心者向けかは微妙だが、50000ルーグと考えると
刀だけでもすべて買うと言うことは、とんでもない金額になる。

「ガンクさん。ルーグでの用意だと直ぐは難しいので、これじゃダメですか？」

道具袋から取り出したのは、最初から何かあった時の為と自分が用意しておいた予備資金の一部であり、道具袋に入れておいたものだ。そのため宝石の所有権は大丈夫であった。

「宝石じゃ無理ですか？」
取り出した宝石は4つ。赤、青、黄、紫で指の第二関節ほどの長さがある。

宝石で鉱物と思うのだが、以前狩った魔獣の心臓が変化したものなので、詳しくはわからない。

「にーちゃん。おめえ何者だ」

「通りがかりの冒険者ですが」

そうじゃなくて、と頭をガシガシとかく。

「にーちゃん見てると自分の常識が、馬鹿みに見えるぞ」

「で、売ってくれますか？」

「よし売った！これならおつりも十分だしな。刀以外の気に入りあれば、何本か持って行って良いぞ」

どうでえ太っ腹だろうと告げる。

「取引成立ですね。では選ばせてもらいますよ」

購入した刀類は、よけるように移動させてもらうと、セルファは他にも使えそうな武器を吟味していく。

自分の好みが刀だったせいか、他の武器はまあまあな出来かと。使いまわしがきき、予備武器として使える剣と小剣、槍、弓で計6本もらうことにした。ついでに矢も1000本ほどもらう。

「おしつ。んでどうする配達はできるが？」

見れば、そこそこの武器の山が出来ている。

「大丈夫ですよ。ここだけの秘密ということで、見たことは他言しないてください」

近くにあった武器からセルファは、道具袋に入れていく。物理法則無視である。

「にーちゃん。それは…」

聞いたことはある。

何でも入れられる道具袋と言うものがあって、極一部の人間が所持している…

それがあれば、重い思いをして荷物を運ぶ必要がないらしいとだ。

「秘密ですよ。ここだけの事です」

良い買い物をしたなあとセルフア。

買った刀の中から1本を選び脇に差す。

「ああわかつたぜ。またなんかあればきな。修理はこっちに持ってきてくれれば、請け負うからな」

「わかりました。またきます。後、私を探したい時は魔獣ギルドに問い合わせればわかりますから
オババさんの所にいるんで」

「おうよ」

ガンクは嬉しそうに出て行くセルフアをみながら、ややげっそりとする。

あんな馬鹿みたいな大人買いで、武器を買って行くやつを初めてみたのだ。

しかも4種の宝石でだ。極上品な石なのはすぐにわかった。

「はあくこれ売って、新しく武器、仕入れるかね」

赤い石を手にとって、かざすように見るガンク…

「……まっ…まさかな…」

ありえない！ありえない！と否定をしたい自分がそこにいた。

宝石は宝石でも、魔獣石ではないか！

魔獣から宝石は取れるのだが確率が低く、買って手に入れようとした場合小さな小国一つくらいは買える値段である。

しかも魔獣石は、魔道具を作る素材に使用できるのだ。

普通の鉱物の宝石では、装飾品にしか使えないのだが、魔獣から取れる魔獣石は別である。

魔道師が欲しがるので、大きな石であればあるほど値段が半端なくなるのである。

「あのにーちゃん一体、何者だ…」

眩く声を聞く者は、誰も居ない。

ただ、ガンクはこの石を持っていることを誰にも言えないと思うのだ。

売る先は、よほど信用出来る所でない限り自分の身が危険だと思うのであった。

異界の魔獣使い 16

16

バルゼク武器屋で武器を手に入れてから、ホクホクとセルフアは採集に向かうため一番近い東門を使う。

行きかう馬車と、冒険者の集団をみながらセルフアの中の人スズが、不思議そうにしている感じがした。

なんでも、馬車とか言った乗り物は、観光地にあるくらいで車と言うものが主流であり、

他にも色んな乗り物のイメージを伝えてくるのだが、不可思議な形すぎてセルフアにはわからない。

鋼鉄製の蛇やら、変な形の鳥もどき。それらに人が乗り移動するらしい。

こっちで言う魔道船のようなものとのことだ。

スズが居た世界では、それらを使って当たり前前に人が生活していたらしい。

驚くことに、種族は人族のみ魔獣はおらず、野生動物や家畜などこちの世界と比べるとかなり平和な世界だと思った。

それでもスズが言うには、他の国と戦争をしていた時もあり、こちと比べればとんでもない規模の兵器を使用していたとのことだ。

ただしスズにはその知識はないので、兵器の作り方などは分からないらしい。

さて採集の薬草は、町からそう離れていない森にも自生しているものだからか、1時間もかからずに依頼数分の採集はおえたのだが、

中々帰れないでいたセルフアだった。

森に入った途端スズが、あれを採集しろ、これもだとセルフアからすれば雑草を集めろと言われまくった。

なんでも、山菜で下処理すればチキンと食べれるものとのことで、スズの世界とこっちでは、植生は似たようなものらしく、見た目が同じだけの違うものではないかと、伝えてみたのだが草のにおいも同じとのことだ。

こっちからすれば半信半疑だが、スズが言うには絶対に山菜とのことで何種類か採集をした。

「奥に来すぎたか…」

町の方向はわかってるので、迷うようなことはないが索敵を使い危険がないか確認をする。

自分がいる周辺は、問題はないが索敵になにかが引つかかる。

「数は5、追われているのは2…」

旅の者か、冒険者が分からないが何かに追われているふうである。

面倒に巻き込まれるのは御免なのだが、スズが助けると騒いでいる人として、困っている人を助けるのが当たり前とのことだ。

スズは、なんとも平和すぎる世界からきたものだと思う。

「…クツ…大丈夫かりファ！」

「ごめん…これ以上は無理…」

森の中を走るのは、男女二人の冒険者だった。男が、女を抱えるように走っている。

逃げているのは、咬みつき蜂からであった。

「足手まといだから、置いて逃げて…リック」

リファと呼ばれた少女は、既に2回咬みつかれているのか、麻痺状態が酷い。

「ご主人様は、俺だ！自分の女捨てていく馬鹿じゃねえぞ！」

簡単な薬草採集のはずだったのだ。咬みつき蜂ごときで、連れを置いてく気などこれっぽっちもない。

「よく言った少年」

ポカンとしている二人にセルフアは、麻痺薬と回復薬の小瓶を投げ渡す。

おかしな仮面を付けた男が、助けに入ってくれたらしい？

呆然としつつもリファに薬を飲ませる。

「ここで待ってるよな。援護してくる」

咬みつき蜂に向かっていった仮面の男？を追う。
応戦しているのが、索敵で分かったが、咬みつき蜂と思われる数が
3に減っている。

「早い…」

咬みつき蜂は、大きさこそ30センチほどなのだが、動きが早く倒
すとなると追い込むかしないと難しい。

低レベルの冒険者では、1匹だけならまだしも数匹となると、なか
なか倒すのが難しいため見かけたら即逃げるが鉄則であった。
追いついたリックと呼ばれた少年は、腹に投擲用短剣を受け地面に
落ちて這っている咬みつき蜂に気づく。

飛ぼうにもその背中の中の羽は切り落とされており、飛べないようだ。
シャーと、威嚇してくる咬みつき蜂の頭部に剣を刺し、致命傷を与
えた。

見れば同じような状態の咬みつき蜂が2匹這いずっており、剣で次
々と刺していく。

「おい！どこにいる」

援護と言うよりも、後始末させられているような感じである。

「こつちだ少年。悪いが投擲用短剣の回収を頼む」

言われたように短剣の回収後、声がした方に向かう。

「あんだ…何してんだよ…」

「見ての通り。羽の回収だ」

「はあ……」

咬みつき蜂の羽なんて、採集の材料にもならないゴミである。そんなものどうするんだと思うリックだ。

「短剣返すぞ。俺はリックってんだ。採集していたら、これに襲われたリファと逃げていたとこだ」

「私は、スーズだ。少女の所に戻ってやったらどうだ？こっちは大丈夫だしな」

「とりあえず。礼は言っとく」

「ああ。運が良かったなリック。次からは、近場でも薬を用意しておくことだ」

言われて、やや赤くなる。

近場だから大丈夫だと過信したのが、リファがああなった原因であった。

異界の魔獣使い 17

17

「簡単な名乗りしかしてなかったから、改めて言わせてくれ。リックス・ルブオーってんだ俺は。んでこっちがリファス・レシア。」

「セルフア・スズ・アララギだ。スーズと呼んでくれればいい」

「こっちもリックとリファでいいよな」

「そうだね。本当に助かりました。スーズさんいなきや私たち死んでた」

「たまたま運が良かった。」

「次もこうなるか分からないが、生きていて良かったと思うリファだ。」

「ムーンストナ通りを歩いていると、薬草を煮た匂いがそこかしこ漂ってくる。」

「この通りは、薬草店が多い通りのようだ。」

「同じ依頼受けてたのかよ…」

「あの後、話を聞けばアウレー草の根の依頼の方を受けていたリックが言う。」

「リック！助けて貰って文句言わないの！」

「今はすっかり、麻痺が治って隣を歩くりファだが、回復薬を飲んだ」

からといって直ぐに
咬まれた傷が治るわけでもないせい、まだまだ痛そうに時折顔をしかめる。

「まったく、一時はどうなるかと思ったけどなんとかなってよかったわ。スーズさんありがとうございました」

「たまたま運が良かったただけだ。今回は運があっただが、次からは注意事項も良くみて考えることだね」

そういえばスーズこと、セルフアは経験不足ゆえの無知での死亡者が一番多かったなと思う。

「なあ……。たまに見かけるあんたもだけどさ。変な仮面の連中なんなんだ？あとなんで咬みつき蜂生かしていたんだ？」

冒険者ギルドに張り出されている依頼を知らないのか、リックが聞く。

「仮面は、一年後に予定しているマスカレード祭の宣伝だ。報酬はランチ1食分程度だが、募集期間が長いせいか、人気がある。私は違うがね。蜂は、死んでから羽を採集すると、羽が濁った色になるからだ。」

蜂の羽の使用用途はわからなかったが、仮面の隙間から見えるケロイド痕から、顔を隠すためだろうと推測するリファだ。

リックはそこまで気づいていないみたいねと思いつながら…。

ルミング薬草店には、ハーブや乾燥途中の薬草が吊るされていた。店の外観が、薬草店と言うよりも花屋っぽい、扱うものはすべて

薬効効果のある植物だろう。

「いらっしゃいませ。今日はどう言ったご用でしょうか？」

この店の主人だろうか？薬草の仕分け作業をする女性が言う。

「冒険者ギルドの依頼確認お願いします。私は後で良い」

「じゃあ先に終わらせませすね。アウレー草の根の買取お願いします。数は7束なのですがいいですか？」

丁寧に取り出した根っこの束を渡す。

「確かに確認しました。こちらにサインしておきましたので、これをギルドに持っていけば報酬もらえます。あら、怪我してるみたいだけど大丈夫？」

血が滲んだ衣類に気づいたのだろう。

「ええ。大丈夫です。処置してあるので…」

注意事項をよく読まずにいたから、とはとても言えない。

「なら良いけど、気をつけてね。たまに冒険者でも簡単な採集依頼を受けて、亡くなる人もいるみたいだから」

「はい。ありがとうございます。」

「んじゃ俺たちはギルド行くわ、今日は助かった。」

「ああ。次は準備しておくことだ…リック後で話がある。ギルドの喫茶で待っていてくれ」

「…わかった。また後で…」

二人を見送るセルフアは、店主に依頼の薬草をわたした。

「お待たせしました。ムルツキ草とアウレー草の根ですね。先ほどの方と一緒にだったのですか？」

「あの二人とは、途中で合流してね」

「そうでしたか。ありがとうございます。あなたが、助けてあげたようですね」

薬草の数をかぞえ、必要書類に記入する。

「なんのことでしょう？」

「とぼけなくても分かりますわ。たまにいるんですよ。不慣れなのに、準備不足の冒険者が怪我をする。この仕事長い私ですが、依頼途中で亡くなる方も何人かいましたわ」

危険はあるが、それ以上に儲けも大きいからか冒険者になる若者は多いが、死ぬ者もまた多い。

「最初の危険を乗り越えた方は大丈夫なのですが、たまに亡くなる方を見ると考えさせられるのです。依頼を出してよかったのだからって」

自分で採りに行くのはむずかしい。出来る者に依頼するのが普通なのだ。

「そうでしたか。その結果を選んだのは本人としかいえないですね」

「そうですわね。ではこちらギルドへ提出してください。薬草は間違いなくすべて受け取りました」

「ありがとうございます。ではまた」

薬草店の店主に見送られ店をでる。

「…追われていたのは、リックたちか」

何をしたのか、または何から逃げているのか知らないが、セルフアがリックに後でまたと告げたのは、森をでて、町に入った辺りから後を追う気配に気づいたからだ。

自分を追う者なのか、リックたちが分からなかったため、ああ言ったのである。

後をつけていた者の気配はない、自分ではなくリックたちに用があるのだろう。

「また面倒なことになるかね…」

『死に戻り』してから碌なことに巻き込まれる体質にでもなったのかと、思いながら冒険者ギルドへ向かった。

異界の魔獣使い 18

18

冒険者ギルドは魔獣使いギルドと違って、ごく普通の建物を利用している。

それでも、中は冒険者たちが使う施設などかなり充実していた。

1階は主に受付となっており、新規登録と依頼受付に、報酬の受渡し、荷物の預かり所

地下はほぼ24時間営業の食堂であり、

2階は喫茶店、診療室、簡易図書室、談話室

3階から上は宿泊施設となっているようだ。

ムルヴァーラの平均的な建物は5階と言うことも考えると、この世界の文明レベルはそこそこ高いのかもしれない。

「確かに受取りました。報酬の100ルーグとギルドガードに追加したPtの確認をお願いします」

Ptは、ちゃんと追加されている。この、どのギルドでも使える共通カードはなかなか面白い。

「確かに、ではまた」

「ありがとうございました」

セルフアは待ち合わせの喫茶店に向かう。

食事や酒を飲みたければ地下なのだが、ただお茶をしたい場合や待ち合わせをする場合だと喫茶店か談話室と言ったところだろうか。

「いらっしやいませ〜1名様ですか？」

「いや先に連れが来ている…」

「スーズこっちだ…」

窓際のバルコニー席より、リックの声がかかる。

「居たようだ。彼らと同じテーブルで、飲み物はここのお勧めで頼む」

「待たせたかな」

「いいえ。でもどうしたんですか？」

リファはてつきり薬草店で、別れそれきりになるかなと思っていたのだ。

普通、冒険者はチームを組まないかぎり一緒に行動することは余りない。

「……………」

店員が、お勧めだという。ハーブを使ったお茶セットを置いて行くのを待つ。

「…時は…なる…空間を…遮断……」

セルフアは、空間を一時的に遮断する詠唱を唱える。

「なっ…」

「さてこれで邪魔は入らない。この空間の外からは、普通にお茶をしているようにしか見えないはずだ」

周囲に声も漏れることもないが…

「おまえ追っ手か！…」

剣に手をかけるリック。

「座れ。その場合だと森で助けた理由にならない」

「だめよリック！」

「ここで待ち合わせしたのは、追われているのがそっちだと分かったからだ」

「本当に追っ手じゃないんだな！」

嘘なら切ると、剣先を向ける。

「私が、何故追わねばならない？理由も知らずにどうしろと？この店に入った時点で二人連れの男がこっちを伺っていたぞ」

喫茶店内は、それほど混んではいなかったのだが、リックたちを伺っている様子なのは確かだった。

「あいつら、しつこいわね」

「で、追われる理由は？話したくないならどうでもいいが…意外といけるなこのお茶は」

お勧めと言われたハーブ茶の色が、毒々しい赤色だった。

ハイビスカスみたいとスズが言っているが、そのハイビスカスが何かわからない。

「スズさん話したら助けてくれますか？」

「内容による…」

「まあそうですね。話聞いたら巻き込まれる覚悟してくださいね。冒険者になる前のことで…」

リファとリックは、もともと幼馴染だと言う。

エブラード王国の、西よりのはじっこにあるタリムと呼ばれる小さな村の出身だ。

タリムの村の納税の時に領主様が、何の気まぐれか村に来てリファを見初めたのが原因とのことだ。

「あんなのが領主なもんか！行儀見習いだと領主の館に行った娘は、孕まされて殺されるか良くても奴隷として売り払われる…」

リックが言うには、近隣の村から見目の良い娘をそうやって集め好き勝手してるとのことである。

殺されるは、連れてかれた娘の大半が自死を選んでしまうからとのことだ。

戻ってこない娘もいつの間にか消えてしまっていることから、奴隷として売られているのではとのことである。

予告なしに領主がきてしまった為、リファが見つかってしまったらしい。

「私がいると、村に迷惑かけると思っ行ってこうとしたんですが、村の皆が逃げろって言うてくれて…」

どうすれば良いのか色々と考えたのだと言う。

通常領民は、領地の移動は冠婚葬祭くらいしかない。その場合は特に許可も何も必要しない。

「領民と言っても、冒険者になれることがわかったので、冒険者になれば移動の自由が保障されるのでリックが機転がせて、二人でなんとか逃げ出して冒険者になりました。」

それが半年ほど前のことらしい。

「西のタリム村：領主の名前は？」

「チュリム伯爵です。なんでも王都の偉い公爵様と、親しいんだとか言っって無理矢理連れて行かれた人もいるみたいです」

その辺の真偽はわからないが、周辺の村では女性は隠されるかしてはいたがどうにもならない状態とのことだ。

「チュリム伯爵は、そのようなことをする者とは噂にもないはずだが…」

確か魔獣の家畜化に、意欲的な人物だったはずである。

チュリム伯爵の領地は、エブラード王国西側の高原地帯にありそれを利用して羊毛産業を発展させるべく、実験を繰り返していたはずだ。

元々は、魔獣の中でも比較のおとなしい種を掛け合わせを繰り返して家畜化させることに成功させた功労者として知られている程度なのだが、現在は数は少ないが王都などに羊毛や毛糸、羊肉の流通をさせていたはずである。

「んなこと言ってもさ、チュリム伯爵の息子が連れていってるんだぜ」

なんでも雇った冒険者くずれか、傭兵のような者を引き連れているらしい。

「村は、羊毛産業をしているのか？」

「ああ。始めたころは、チュリム伯爵もよく顔だしたって聞いたけどよ。10年も昔だぜ」

今は姿もみせず、息子が代理だと言う。

10年前までは、本人の姿を見たと言うのだが、気づけば王都から呼び寄せたと言う息子に代替わりして現在の状況が出来上がっていたらしい。

「リック。今日はどこに宿をとっている？」

手で上を指すしぐさをする。

「こここの二人部屋をとってる。ここなら安いし、冒険者ギルドで襲う馬鹿はいないだろう」

「確かにそうかもしれないが、部屋を引き払って私についてきてくれないか」

「どこへ行くんですか？」

リファが聞いてくる。

「チュリム伯爵は、元々魔獣の家畜化でこの魔獣使いギルドと繋がりを持っているはずだ。そうなると魔獣使いギルドの方が、チュリム伯爵に詳しいかもしれない」

どうも何かを見落としているような気がして、それなら知っているような人物を探して聞いた方が早いのではと考えたのだ。

「でもよ、追っ手いるんだろう？」

「追ってこようが、なんとかなるはずだ。半年も逃げ切っていたん

だ。今更じゃないか？」

追う理由は、リファを手に入れることか、二人の排除ではないだろうか。

まだどちらか分からないが、動くなら早いほうが良いはずだ。

「遮断を解除する。冒険者ギルドの1階で待っているから、ここを引き払ってくれ」

二人がうなずくのを確認してから、遮断の解除をした。

店内では、こちらを伺っている様子の男連れに注意しつつも、一体何が起きているのかと思うのであった。

「なあ……ここって魔獣使い以外が入ってもいいのか？」

ポカーンと見上げた先には、空を飛ぶ優美な魔獣が発着陸している。飛行系の魔獣は、町の上空を飛ぶのはかまわないのだが、必ず発着陸はこのギルドからと言う規則がある。

違反した場合は、現金での罰則となるようだ。

「すごいねえ〜」

この町に来てから魔獣使いの姿をみるが、魔獣使いギルドがこれほど大きい施設だと思っていなかったらしい。

「用があれば良いんじゃないのか？」

ギルドに依頼をしにくる一般人もいるだろう。確かにここの広さは、初めてだと驚きも大きいかもしれない。

「すっげ〜。龍に彪に…」

かなり近くで見える姿に興奮しているようだ。魔獣は男のロマンだそうだ…。

『…セファ〜』

タツタツと駆け寄って来たのはシラユキであった。

調獣士をほっぴりだし、訓練場への移動途中にセファの姿を見かけて駆け寄ってきたようだ。

微笑ましいことに、一緒に訓練する予定の魔獣の仔を引き連れていた。

「調子はどうですかシラユキ？」

『訓練…つまんない』

もっと撫でると、セファに擦り寄る。

ここへ来た頃とくらべると、成獣並の大きさになった。
まだまだ甘えん坊ではあるが、地彪よりもやや大きくなりそうである。

引き連れてきた地彪の仔たちは、おとなしくすわっていた。
どうもシラユキを女王様扱いしているようだ。

「「ひっ彪！」」

囲まれてしまう形になるせいか、二人はやや青ざめて動けなくなっているようだ。

「怯えなくても、彪は襲ってこない」

『誰…？』

フンフンと、匂いをかいでいる。

「知り合いだ。シラユキこそ訓練はどうだ？調獣士を困らせて、いるようだな」

苦笑しながら近づいてくる調獣士に会釈する。

「お戻りでしたか。シラユキが走り出したのには焦りましたよ」

「これは我がままでしょう？厳しくしてかまいませんよ」

『む〜…アタシがんばってるよ！』

誉めてよと、擦り寄る。かなりの甘ったれだ。

「いえいえ、シラユキが来てからののが楽ですね。他の彪がこの通りですから」

7頭ほどの地彪の仔は、ほぼシラユキと同じ大きさだが違いはシラユキをリーダーと思っっていることらしい。

本来、彪は子育ての時にしか群れにならない。

リーダーを決め、それに合わせることはそうそうないはずなのだが、シラユキには無条件で従うようだ。

「シラユキは群れのリーダーなのか？」

『違う。アタシの邪魔するから叩きのめしたら、こうなっただけ…』

当初は、シラユキの方が小さかったせいか、イジメもどきなことがあつたらしい。

「彪は、無条件に強いと思つた者に従います。シラユキは特別ですから、なおさらですね」

調獣士は、彪の習性などから考えても、地彪の仔がシラユキの方が上と認めた結果だからとのことだ。

「そうでしたか。では、シラユキ訓練に戻りなさい」

『アタシ…セファといたい』

「訓練が終わつたらいられるぞ…」

何をどう言ってもこれ以上はかまってももらえないと知っているせい
か、我慢することにしたようだ。

『待たせてしまったようですまない。どうした？』

地彪に囲まれて、固まったままの二人。

流石にかわいそうだと、調獣士が呼び笛を使い連れて行ってくれた。

「はははは…」

緊張のあまりへたり込む。

「怖かった…」

まあこれが普通の反応だろうなと思うのだ。

「ここでは魔獣と、今みたいに遭遇することが多い。いちいち反応
してたらきりない」

「そりゃスーズは慣れてるかもだけどよ」

「魔獣つてしゃべるんですね…」

二人とも触れるほど近くで初めてみた魔獣が、居なくなりホツとし
たようだ。

異界の魔獣使い 20

20

まず最初にするのは、チュリム伯爵を知る人物がいると思われる畜産科を探すことである。

「君、すまないが畜産用に研究されている魔獣に関する場合は、誰に相談すればよいんだ？」

どこの受付で良いのかわからず、総合窓口案内に聞く。

「畜産用となると、畜産科のウォルフナー先生の研究所になります。畜産科は、別棟になりますので、この建物をでて左にある建物へ行ってください。そこで大体の実習などが行われているはずなので、詳しい質問はそちらで聞いた方が早いです」

「わかった。ありがとう」

「どうしてですか？チュリム伯爵のことと、畜産用の魔獣って関係するんですか？」

チュリム伯爵の、現状を訴えたのが何故こつも話がずれていくのかわからないリファである。

「チュリム伯爵が、畜産用の魔獣に精通していたのなら、ここにも知り合いがいるはずだからだ」

「「??.?」」

スーズが言うことの意味が、まったくわからないリックとリファであった。

畜産科の厩舎は、かなり独特な獣臭さがあり、何種類かわからないが食肉用、生乳用、獣毛を利用する魔獣が研究されている。

「なんか変な顔だな」

リックは柵の向こうに見える魔獣を見て言う。

「メルファードとピグリスの外見を持ち合わせているように見えるが……」

顔がメルファードで体毛の柄がピグリス。

メルファードはイノシシで、ピグリスは柄のある豚と想像していただけは良いだろうか。

どちらも食肉できる魔獣だ。

どうやらここは魔獣のなかでも、食肉に向けた獣を交配させている場所のようである。

「あそこに誰かいますね、私聞いてきます」

リファは数人の実習生らしき者がいるほうへ、走っていく。

「ウォルフナー先生みつけましたよ」

リファの横に立つ杖をついた年配の男性が、探していたウォルフナー先生らしい。

「君たちは……？ここで話もなんだからワシの部屋へ来てくれたまえ」
側にいる実習生に、しておくことを指示すると部屋へと案内する。

「さて散らかっているが、適当に座ってくれ」

ウォルフナーの研究室は、来客用のソファがある場所以外は、全て畜産用の書物など所狭しと散らかり放題である。

「ワシに何の用かね？冒険者に見えるが？」

杖を傍らに置いて、向かい側のソファに座る。

「はじめまして。私はスーズと言います。こちらの二人は、タリム村からきた冒険者のリファとリックです。魔獣の畜産改良で、チュリム伯爵と言う方がいるのですがご存知ありませんか？」

「知つとる。古い友人の一人じゃな。向こうは20ほどワシより年下だが、それなりの評価はされおるはずじゃな。ここ最近は使っていないが、あれは研究馬鹿なところがあるから改良にのめり込んでおるんじゃない」

確かに10年ほど前までは、そうなのだがその後を知りたいのだ。

「チュリム伯爵ですが、代替わりして息子さんが領地を治めている
そうです。ここ10年ほど本人の姿は見えないようです」

「はっ……？今なんと言った？」

「息子さんが…」

「チュリムに息子などおらぬぞ。研究馬鹿が講じて、結婚もしてい
ないはずじゃ。養子の話もまったく聞いたこともない」

「じゃあ、あれは誰だよ！近隣の村から若い娘浚ったり、したい放
題やってんだぞ！」

リックは、浚われた娘たちの現状などをこと細かくウォルフナーに
話す。

「妙じゃの？4年前にチュリムの名で、論文が発表されておる。
見た限りでは、本人の筆跡であった」

となると4年前までは、確実に生きていたと言っことだろうか？

「気になるようであれば、貴族院へ問い合わせしてみればどうじゃ
？あそこは婚姻や養子の記録が残されておるはずじゃ」

ウォルフナーからは、それ以上の成果は得られなかったがチュリム
伯爵の息子？と言う新たな謎が出てきたのであった。

異界の魔獣使い 21

21

チュリム伯爵とは、元々この魔獣使いギルドで知り合ったのが、今からだいたい40年ほど前のことらしい。

当時のウォルフナーは、二十代の駆け出し魔獣使いを目指していたのだが、自分の適性では魔獣使いになることは難しく、かと言って魔獣使いには未練があったせいもあり色々ここでしているうちに、今の魔獣の畜産用への改良に落ち着いたとのことだった。

当時のチュリム伯爵は、一言で言うなら魔獣馬鹿。魔獣好きと云ってしまえばそれまでなのだが、知識面でもかなり意欲的な人物だったらしい。

ただその当時から既に両親は亡く、後見していた爺さんがいたらしいのだが、その人も年齢的にみれば既に鬼籍だろう。

昔から身内に縁がなく、魔獣にのめり込むことで寂しさを紛らわせていたのではないかとのことである。

どちらが、より優れた魔獣を生み出せる、もしくは家畜化できるのかお互いに深夜まで談笑していた頃が懐かしいとのことだ。

5年ほどここで、色々な研究をしていたのだが領地経営をしなくてはならないためその後は自分の領地へ戻り、領地の風土を考え組み合わせた完成させた魔獣の羊毛や肉などの改良に成功して今にいたるのだが、10年前になにかあったのだろうか。

「とりあえず、チュリム伯爵の系図確認からした方がよさそうですね。息子と言う人物が系図にいるのかの確認と、リックとリファは冒険者ギルドへ行き、チュリム伯爵領の周辺の村の情報を知る冒険者がいないか探してください。基本的には二人で行動すること、人通りのない道などはなるべく使わないように行動してください。連中、リファを今だ付狙っているようですから」

「ワシが知るチュリムなら、人を浚うようなことはさせんはずじゃが、いかなせ会わないでいた年月を考えると、わからんしおう」

もつとこまめに連絡を取り合うべきだったかと思うのだが、お互いに研究馬鹿なところがあつたので過ぎてしまったことを後悔しても仕方がない。

「ウォルフナーさんには、手紙の用意お願いできますか？普通に元気でしているかとかの近状を知らせるもので構いませんので」

その手紙を利用して、チュリム伯爵と面会をする足がかりとするこ
とにして、それまでに調べられることは調べてしまうつもりだ。

「ワシは構わんよ。その嬢ちゃんが狙われているなら、いいものがあるが使ってみんか？データを定期的によこしてくれるなら貸出しではなく譲るのもありだが」

「「「いいものですか？」」」

「みてのお楽しみじゃ。こつちとしてはデータ取ってくれる人物探しておつたので協力してくれんか？」

謝礼はそのいいものでも良いとのことだった。

ウォルフナーはテーブルの上に置いてあったベルを鳴らす。

「お呼びでしょうか教授」

来たのは助手の男性だった。

呼ばれるタイミングを待っていたのか、手にはお茶を持っている。

「失礼します。遅くなりましたが、お茶をどうぞ。ここで改良している物なので感想くださると助かります」

「すまんのう。お客さんに先に茶を出すべきじゃったな。Hシリーズを隣の修練室へ連れてきてくれんか？被験者に合わせて様子みたいんじゃないが」

連れてと、言うことは生き物？と考えるセルフアだが、それが二人の助けになるなら利用するべきかと考えた。

「なんだろうもないものって？」

「????わからないね。あっコレ美味しいですね。ミルクにお茶混ぜてるのかな？」

「もう少しお茶の味が濃くても良さそうです。」

「まだまだ改良の余地はありそうじゃが、こんなものかのう」

ミルクに茶葉を混ぜて少し煮込んでみてから、砂糖を入れたものらしい。

「好みで何か香辛料も混ぜたら面白そうですね」

前世か憑依かわからないが、異界人であったスズの記憶を持つセファは、シナモンと言うスパイスがあることでそう呟く。ただこの世界で、シナモンにあたる香辛料が存在しているのかは知らない。

スズが言うシナモンが、この世界にあるのかスズの世界のシナモンを知らないセファにはどうしようもないのだ。

「ほう。香辛料が面白そうじゃな。色々調べさせるかのう」

コンコンとノック後、扉が開く。

「教授、用意できました」

助手の青年が、呼びにきたようだ。

「よし、ではこちらにきてくれんか。騒がなければ、何もしいはずじゃ」

ウォルフナーについて修練室へと案内される。

「これがHシリーズと呼ばれる魔犬じゃ」

そこに居たのは、10匹ほどの同種の魔犬だと言う。かなり賢いのか、お座りの状態でこちらをみている。

「すごい」

「大きいです…」

「私は遠慮しておきます。シラユキがいますからね」

『シラユキ…』

その名に反応した魔犬が吠く。

「しゃべった！」

「知っているのですか？」

魔犬に聞いてみることにした。

『アレハ、フソンダ…』

不遜と言いたいらしい。

確かに思いついて風に見えるのかも知れない。

種族的な違いも大きいと思うのだが、どう思うかは個人の自由だ。

「どう考えるかは、貴方の自由でしょう。しかし、大きいですね」

外見は大型犬のシェパードのようだ。

ただそれに、二周りほど大きくしたサイズなのである。

跳びかかれば、ひとたまりもなく押し倒されるだろう。

「護衛用にもってこいと思わんか？」

「じーさん護衛用はいいけどよ。食費かかりそうだよな…」

もし、譲り受けるとして世話することを考えると、一番金がかかるのは食費だろう。

畜産の村に住んでいたリックからすれば、日々の餌代の方がきつい。

「基本は、朝と夕に食べればよいだけじゃが、森にでも放せば自分で餌をとるぞ。」

街中ではそう言う訳にもいかないのだが、人間の3倍ほどの量を食べるらしい。

食料事情にきつい場所でも、自分のことは自分でするらしいので、お試して預かってみるとのことだった。

「かつこいい〜。リックこれ欲しい！背中に乗せてくれるかな…。触っちゃだめかな…？」

リファは物怖じしないのか、魔犬に近寄っていく。

「ちょっと毛は硬いね」

はじから触りまくっていくのだが、魔犬たちはじっとおとなしくすわっている。

命令には忠実なのだろう。

「どれを選ぶかとなると難しいです。どうしたら良いと思いますかスーズさん」

「そうですね。シラユキと会うことも多くなると思うので、シラユキに言い負かされることはないと思える魔犬は1歩前に出てください」

魔犬同士で、思うこともあるのか、シラユキを不遜と告げた魔犬が前にで出る。

「これの名前は？」

「H-07ですね。名前は今の時点ではありません。持ち主となつた方の好みで名前はあったりなかったりしますね」

助手の青年が、この魔犬の持つ特性や気をつけるべき注意事項を告げていく。

「よろしくね。名前はあったほうがいいよね？」

「好きにつければ良いと思いますが……」

「名前はジーファイでどうかな？」

『ワカッタ、ジーファイダナ』

リファの手を軽く舐めて了承する。

「言い忘れたが、これでまた7ヶ月じゃ。成犬になればもっと大きくなるが、成長が安定すれば自分で大きさを変えることが出来るはずなんじゃ便利じゃぞ。ただ確実に出来るのかわからん。珍しいことが起きた場合に知らせてくれると助かる」

どうも改良して生まれたのはよいのだが、Hシリーズはまだ未知数な部分がありすぎて、それを知る為の報告を定期的に欲しいとのことであった。

異界の魔獣使い22（前書き）

感想くれた方ありがとうございます。
まったりと更新しています。

異界の魔獣使い 22

22

『でっかい凶体が、邪魔!』

シラユキは、長い尻尾を左右に振って目の前にいるジーファイに喧嘩を売っている。

ジーファイと言えば、プイツと相手にする気もないのか、伏せたままシラユキを無視しまくっている。

「シラユキ元気ですね〜」

のほほんとシラユキとジーファイを見るスーズことセファは、特に割って入ることはしない。

「どう見ても、喧嘩売ってんだらうアレは」

良いのかよ。

あれ、絶対喧嘩になるんじゃないかとリックは呟いている。

「ジーファイは、シラユキに興味なさそうですね」

一応はジーファイの飼い主となったリファは、魔獣使いの見習いとなつた。

いつかジーファイを手放すかもしれないが、魔獣と居る以上は魔獣使

いとのことらしい。
なんて大雑把なと思ったが、魔獣を側に置くこと＝（イコール）魔獣使いとのことなので
魔獣使いギルドの登録もこれから特例で、してくれるとのことだった。

「さて、二匹は放っておいてこれからのことを話そう」

ウォルフナーとの会談の後、オババの小屋の側にある外来者向けのお茶スペースとなっている東屋にいた。

「現在のチュリム伯爵、この場合息子の方だがこれが誰なのか確認する必要がある」

「わかってるよ。貴族院とか行くんだろ？俺が行ってくるぞ」

ウォルフナーから、チュリム伯爵には息子など居ないと言われ。

どうしても気になって仕方がないリックは自分が確認に行くと言う。

「一人では止めたほうが良い。まずリファは、ジーファイとの訓練をしてくれこの魔獣使いギルドから出ないように。リック、貴族院は最低でも、それなりの地位のある者の協力がなければ門前払いになる。その辺にいる冒険者では中に入ることできない」

貴族の為にある所なので、一介の冒険者風情では追い出されるか悪くて捕まる可能性もあると指摘した。

「それじゃあどうすりゃいいんだよ？」

このまま追われる状態にいるのも癪に障る。

「あら、それなら大丈夫よ。お待たせ連れてきたわ」

エステアである。

「ありがとうエステア」

「まだ落ち込んでいるみたいだし、これがいい活力源になれば良いんだけどね」

エステアが連れてきたのは、このギルド長である。

ぶすつとしており、かなり不機嫌そうに見える。

「仮にも、長であるならばいい加減、死人のことは諦めたらどうです?」

2ヶ月前の魔道船の墜落事故で亡くした友人のことを、吹っ切れていないことに、エステアから愚痴で聞かされていた。

「お前に何がわかる!」

他人が口出しなどするな。と言いたいのだろうか、その亡くしたはずの友人は自分のことなのでうつとおしく思うのも仕方ない。

「分かりませんね。私は貴方ではない。ろくにギルド長の仕事もこなせないならば、引退したらどうです」

その方が誰にも迷惑もかからない。

この生真面目で直情型の友人の性格は好ましいが、ものには限度がある。

「ラステイル・カラ・ミルヴァ！ギルド長である貴方へ依頼します。貴族院ヘリックを連れてチュリム伯爵の系譜を調べてくれませんか？魔獣に関わりある事件が起きた場合の、捜査権限は貴方にあるはずです。これはオババからの依頼になります」

魔獣使いギルドでは、魔獣を使役することだけでなく家畜化の改良も行う。

そして魔獣を使った犯罪などの捜査も含まれる。

ただ現時点では魔獣を使った犯罪は起きてはいない。

チュリム伯爵が魔獣の家畜化をしていると言うことだけである。

オババの名を出したのは、そう言えばラステイルが断らないと分かってのことである。

「魔獣の犯罪は起きていないのではないか？」

「ええ。現時点ではおきてませんね。ただ行方不明になっている方が、現時点でいるのは確かです。魔獣が関わっていないのならそれにこしたことはありませんが、行方不明になっている方はどうしているのか気になりませんか？」

聞けば、みな若い娘だけだと言う。

死体もみつからなければ、目撃証言もないのだ。

「…わかった。貴族院へは同行しよう」

「やっとラス兄さんらしく、動いてくれそうね」

この2ヶ月は鬱々として、見てるほうもゲンナリさせられた。

「同行するのは俺だぞ。よろしくギルド長」

リックは改めてリファとタリム村で起きていることだけでなく、チユリム伯爵領地内で起きているだろう各村から浚われるように連れ去られた娘たちの現状と、リファも狙われていることなどをかいつまんで話す。

「そのチユリム伯爵の、息子と言つのを調べれば良いんだな。系譜と婚姻関係からだな」

やることが出来れば行動も早いのか、ラステイルはリックとリファを交えて今後の活動をどうするか話し合っている。

「ふふふつ。ありがとう。あれでラス兄さんも、少しは落ち着くはずね」

エスティアは、一時は余りの落ち込みようにどうすれば良いのか困ったほどだと告げる。

「だと良いですが、手綱はちゃんとしてください。あれは、眼を離すと何をしでかすか分からない時があったはずです」

「ええつ。わかってるわ。あとリファちゃんの方の護衛は私がしておくから」

「お願いします。貴族院はあの二人でよいとして、本来リック達に頼む予定だった冒険者ギルドの方へは私が動くことにします。なの

で、聞かれたらそう言っておいてください」

何故冒険者ギルドなのかと言えば、チュリム伯爵領地の方での冒険者依頼の傾向と、現在までの依頼内容など確認して起きたいことがいくつかあったからである。

冒険者は国中、依頼があればどこへでも行くのだ。

ある意味こちらの知らない情報を手に入れることも出来るかもしれないし、チュリム伯爵領地内のちよつとした異変が調べられるかもしれないと考えてのことである。

「わかったわ。でも貴方としては、今回のことはどう考えているの？」

「何も、私にはこれと決め付けることはないですね。ただ気になったから今こうしているだけです。まあ簡単に言うと暇つぶしでしょうか」

『死に戻り』した事実を身内に知られない為に、自分が死んだこととした。

過去の『死に戻り』が起こした惨劇を前提に、馬鹿正直に自分が『死に戻り』だと身内に話した場合、待っているのは幽閉だからだ。自由もなく、自分の人格が2つある状態で幽閉されて終わるのは御免こうむる。

スズ・アララギと言う異界の女性の記憶があるだけで彼女は、決して破壊者にはなりえない。

ランダムで起こる『死に戻り』現象は、未だに説明はされていないのだ。

「そう」

「ただ、精霊がないと不自由な時はありますね。自分でも魔法は多少は使えますが、精霊魔法と比べると雲泥の差がありますから」

精霊魔法を使えるものは、やはり血筋が大きい。

その血筋の家に憑くと言った感じだろうか。

もしくは、精霊が興味を引く存在。

数は多くないのだが、市井しせいにも精霊魔法を使えるものはいる。

「離れた子は呼び戻さないの？」

「…無理でしょうね。再度精霊魔法を使うことは出来るのはわかっています。ただ同じ精霊が憑くことが出来るか知らないので答えようがありません」

精霊が離れて行く原因のひとつに宿主の死がある。

一度死んで生き返っても、別の人格の派生により自分が憑いていた人間を認識できないのが原因ではないかと思うのだ。

「まあ、今は精霊は憑いていませんが見えることはできません。もう少しシラユキが安定したら探すことにしますよ」

チユリム伯爵の方の問題を、先に解決してから精霊探しに行こうと思うのであった。

そんな風にエステアと話していると、シラユキがジーフィにアタックして弾き飛ばされている場面を見る。個体差が違いすぎるので、シラユキが吹っ飛ばされているのは仕方がないのだが、ジーフィのあれでまだ子供な体格を考えると、成体になった時はどれほどの大

きさになるのかと思うのであった。

異界の魔獣使い 23 (前書き)

話の流れから少し短いです。

異界の魔獣使い 23

23

ムルヴァーラにおける貴族院は、貴族が魔獣を持つ場合の事務手続きおよび貴族が所持する家畜化の魔獣の管理などが中心である。

魔獣使いとなる貴族は滅多におらず、だいたいがガーディアン的な役割を持つ魔獣を持つことをステイタスとして考えているようである。

そのせいもあり、魔犬と呼ばれる魔狼を改良したガーディアン犬が現在では20種ほど存在しているのだが、まだ種の安定に不安もあることから余り貴族社会で見かけることは少ない。

だが、人気は高いのか最近では小型化した魔犬が貴族令嬢などの護衛の任に付くことがおおいようである。

「なんかしてることは、魔獣使いギルドとかわんなくねえ？」

リックは、規模こそ小さいが貴族院の役割をラストイルから聞いた。

「ああ。事務手続きなど、本来なら魔獣使いギルドでも出来る。だが、貴族連中は庶民と一緒にでは貴族としての誇りがゆるさないらしい」

平民とは違い、貴族は偉くて当たり前。

貴族基準の考え方と、平民の考え方は余りにも真逆なため衝突しないためにもあえてわけているのだという。

「ふうん。貴族つてのも面倒なんだな」

「今はまだ良いが、その口調は中に入ったら改める。仮にも俺の従者として付いてきているだけだからな」

聞いた話から、リックたちの村を管理しているチュリム伯爵の現状の確認が早急に必要だと思われるからだ。

結婚をしてもいない、養子させも取っていないと思われる貴族がいる場合、本来なら自分が出てくる必要はないのだ。

知りたいことがあるなら別の人間に調べさせればよいだけなのだが、2ヶ月前の事故で亡くした友人を思いやって

落ち込んでいた自分に妹が助けるように言ってきたから協力することにした。

「わかったよ。スーズさんならさ、もっとやさしく言ってくれと思うぞ」

「そういえば、あのスーズと言う男はなんなんだ？ ちゃらちゃらとした仮面を付けて、オババの知り合いのようだが」

思い出してもムカついてくる。

言うことが正論ばかりで、碌に反論できる隙がまったくなかった。

「俺も知らない。森で助けてもらって、気づいたら色々助けてくれて、仮面は顔の火傷隠してるからだろうってリファが言っていたから、付けてる理由はそれじゃないのか？」

「エステシアの知り合いらしいが、どうも気にいらない」

古くからの友人だと、妹から紹介もされたが自分が知らない友人が妹に居たことが気にいらぬ理由なのだろうか？

「気に入らないなら、話し合えば？あの人、かなり謎あるみたいだけど基本的に助言や助けてもらったりした俺とすれば、悪い人じゃないとおもっぜ」

言うことが、かなり辛辣になることもあるのだが、当たり前のことを言ってくれるのだ。

「…分かっている。魔獣が懐いていたからな」

滅多に見かけない白雪彪に懐かれているのだ。

あれを見た時に、本当に白雪彪か抱き上げて思いつきり引つ掛かれたのは痛い思い出である…。

同じ魔獣使いとしては、信用はできそうだが、

だが、なんと言うか気に入らないのである。

「魔獣といえば、あんたの魔獣は？」

そういえば紹介されてからも、連れていかなかった。

「治療院にて休ませてる。特に深い怪我はないが、疲労を考慮してだ」

ラストイルの持つ魔獣は、翼種魔狼と呼ばれる種である。

翼を持つのだが、飛ぶ時以外では引っ込めているせいか見た目は普通の魔狼にしかみえない。

今回、同行しなかったのは疲労した翼の羽休めの為もあってのことである。

2ヶ月前の魔道船の、事故の折では飛んで救助出来そうな者を空から救助しようとしたのだが結果は芳しくなかった。

助けて上空に浮き上がらせようにも、それを見越して水棲の魔獣が襲い掛かってくるのだ。

助けられたはずの命も、助けられなかった。

その時の疲労が、まだ抜けきっていないことを考えて休ませている。

「さて、ここに入ったら何を言われようが全て無言でいる。憤ることもあるかもしれないが、所詮は貴族だからと思えばいい」

門番に用件を告げ、通行証を受け取ると貴族院へと向かう。

異界の魔獣使い 24

24

貴族院と呼ばれる建物は、王都を意識してか外見は白亜な建物である。

扉の両脇には警備兵がおり、通行証を呈示して本日の用件を告げ中へと案内された。

先に行く警備兵に付いて行きながら、無駄に広い回廊とそこかしこに掲げられている美術品を見るとここは一般とは切り離されている世界なのだ実感する。

時折すれ違う貴族？なのか分からないが、こちらを嘲るような視線と何を言っているのか分からないがヒソヒソと小馬鹿にしたような感じが悪い相手の態度には、ここはそう言うことと言い聞かせて我慢する。

「こちらに、主管事務官の方がおります」

案内していた警備兵が、目的の場所へ着いたことで退出していく。

「ここは？」

「貴族族の巣窟だな……」

忌々しそうに呟くと、軽くノックをして中に入る。

「…誰かと思えば。ここに何の用だ？」

「用があるから来た。ここで調べ物をしなきゃならん。先にお前に話を通しておかないと、この連中はすぐ難癖つけてくるからな」

両脇に秘書なのか、綺麗な女性二人が書類を持って控えている。

この主だと言うややでつぶりとした年配の男性が、悪趣味な指輪を両手につけ嫌らしい笑みをみせている。

この男は会う都度人を不愉快にさせ、いやみなことを言い、相手を不愉快にさせる。

「好きにしる。そう言えばお前の弟分だった小僧が死んだらしいな…死体も残さず水棲の魔獣に食い尽くされたそうじゃないか」

それが誰であったかなど、この男はどうでもいいのだろう。

目の前にいる気に入らない存在が、へこんでいるのを喜んで見ているような男だ。

「だからなんだ…」

この男に言われるまでもないことだ。

「ふん、反応がなくなつたらんな。もう良い。さっさと下がれ」

脇に立っていた、秘書の一人を引き寄せると強引に自分を上に座らせ第三者が居るにもかかわらず、嫌らしい手つきで女性の胸をもみだす。

「…ッ！」

用件はそれだけだと、リックを連れ慌しく部屋を後にした。

「なんだよあのおっさん、真昼間からさかかっていてみっともねえ」

控えていた秘書の女性も嫌そうなる素振りも見せず、されるがままだった。

「あの男の両脇にいたのは、奴隷だ。逆らえば死ぬことがわかってるからされるがままなのさ」

聖王をはじめとした上位貴族の品性はよいのだが、下へ行けば行くほど貴族の品性は落ちる。

あの男のように、奴隷をはべらし人前を気にせず手を出す。

いくら聖王や英雄たちが魔族との功績があっても、この国の貴族連中は腐っている者が多い。

すべて品性良くすることなど出来はしないのだ。

表向き奴隷の所持を禁止しているように、裏では奴隷とわからぬようにして所持している貴族も多いのだ。

「うえっ…あんなのが、うじゃうじゃいんのかよ…」

「その通りだ」

チラッとリックを見る。

「そっぴやお前も気をつけたほうがいいぞ。俺から離れると、男もOKな奴がひっかかるかもな」

男娼の真似事されるかもしれないぞと、からかう。

「マジ勘弁…俺にはリファがいる！」

ここを出るまでラスティルの側から離れないようにしようと考えてるのだった。

次に向かった先は、資料室のよう部屋の中は貴族関連の書籍や書類の束がおかれている。

受付をしているのは、下級とはいえ貴族らしく態度をみても見下している感じがまる分かりで気分が悪くなる。

ラスティルはそんな受付の様子を一切無視して、必要書類を持ってこさせる。

その量は、机に乗り切らない量である。

「……ありえないだろうこれ。今日中に出来んのかよ」

絶対無理！だとリックが頭をかかえている。

「必要な所だけ探せば良いだけだ。ほれ、まずは魔獣改良関係は省け」

ほとんどがそれ関連をしめているはずなので、それを省き納税関連

の物を探せと告げる。
リックが仕分けしている間に、チュリム伯爵家の系図を確認することにした。

こっちは1冊の本の状態にされているからか、直ぐに手に取ることができた。

「…確かに結婚はしてないようだな。養子の届出もない」

系図から確認をすれば、家族縁が薄いのか生存しているのはチュリム伯爵だけのようだ。

このまま跡継ぎかいない状態では、断絶するのは間違いなしだろう。複製を作るために転写魔法を起動する。

詳しい検証は、戻ってからすれば良いだけなので、必要と思われることは転写をすれば良いだけだ。

「てかさ…ほとんど魔獣改良の書類ばっかだぜこれはさ」

言われるまま、より分けてみれば多すぎると感じていた書類の山のほとんどが魔獣改良の物ばかりだ。

「口動かすより、手を動かせ。さっさとここ出たければとっと動け」

ここでこうして書類をあさっていることも、受付に居た者から報告が言っていることだろう。

貴族でもない冒険者風情が、ここでしていることを詮索する貴族はいるはずだ。

リックたちが言うことが、事実らしいと言うことは冒険者ギルドでも多少は確認できていた。

あのいけすかなスーズと言う青年は、思っている以上に優秀らしい。冒険者ギルドで調べたチュリム伯爵領での冒険者依頼のいくつかで、冒険者の行方不明で終わっている物があつたからだ。

それだけならば依頼をこなせなかつた冒険者の死亡と予測もできるのだが、よくよく調べてみればチュリム伯爵が出した依頼での行方不明者である。

それに誰も気づかなかつたのは、繁盛期とよばれる季節だけの依頼にあつたようだ。

その時期は、多くの人や物が動くためちよつとした冒険者の行方知れずなど、いつものことで済まされていたのだろう。

しかしそれに気づいたのは、3年ほど前の依頼からである。

冒険者ギルドでも、依頼の記録を取っているようだが、3年ごとに廃棄していたせいでそれ以前の記録が分からない状態であつた。

「なににせよ、何かが起きているのは確かみたいだからな」

それが何なのか、今の時点では分からないのがもどかしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933y/>

エブロード王国物語 - 異界の魔獣使い -

2011年12月4日01時56分発行